魔法世界の超能力者

ジュナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法世界の超能力者

【Ｎコード】
Ｎ８２７９Ｐ

【作者名】
ジュナス

【あらすじ】
一人の少年がテンプレ通りに死んで転生を果たす。　そしてその行き先はネギまの世界！　神に超能力を貰った少年は一体どうするのか！？　※作者の趣味全開で参ります。原作は最終的にはほとんど壊れますのでそういうのが嫌いな方は戻ることをお勧め致します。　＊ついでに言うと超能力メイン補助にその他って感じで

プロローグ：チート誕生！？（前書き）

いや～前のを書いてる途中なのに新しいのを書いて申し訳ない。

つうかあっちは最初ノリでやってたら先のことを考えたらどうしてもバッドエンド（しかもどうしようもなく）になってしまうので多分受験が終わるまで更新しません。天啓が来たら別ですが

ぶっちゃけ書く理由がストレス発散なのにネタが浮かばなくてさらにストレスが溜まったためこっち書くことにしました。

感想くれると嬉しいです。

ではどうぞ（　・∀・）つ

プロローグ：チート誕生！？

「……知らない天ｚｙ…いや、知らない空間だ」

俺は目が覚めたら前後左右上下何も無い空間に一人佇んで（浮かんで）いた。

「ああ、多分これは夢だ。つまんねぇ夢だな」

俺がそう呟いていると視界に土下座してる、イケメルヘン（わからない人は背中に白い羽の生えたホスト風のイケメンってイメージしてね☆）っぽいのが居やがった。

なんだこの注釈、キメェ。

星なんか出してんな。

おっと思考が逸れた。

それよりもなんだこのイケメルヘンは。何か近くにＡボタンがあるかの如く話しかけなきゃいけない雰囲気が出てるのは何故だ？

「おいお前。なにｓ「スイマセンっしたぁぁぁぁ！！！！」ウルセエ！」

何か殴ってしまったが俺は悪くないと思う。つうか絶対こいつが悪い。
さっきので鼓膜が切れるかと思ったわ。

「いきなり謝られても意味が分からん。
落ち着いて詳しく話せ」

「は、はい。実はですね……」

説明中

「と言うわけです」

はい。テンプレですね、わかります。

え？何言われたんだって？
じゃあ要約します。

神のミスで俺死亡
←
ヤベ！この人間違えて殺しちゃった！？
←

上役の神様に土下座してきてどうすればいいか聞く
←
マンガの世界でも平行世界（パラレルワールド）でも好きな転生させとけ。どっちも嫌なら天国に送れ。
あとお前はクビ。最後に土下座で謝ってこい。
←
注文を聞かれた。

とこんな感じ。
ね？テンプレでしょ？

さてさて。もちろん行くのはマンガの世界何だが……
能力は付けられんのか？

「なあ。マンガの世界だとなんか注文出来ない？」

「あ、はい。五つぐらいなら出来ますよ」

フハハハハ！！！
やっぱりそうじゃなくちゃな！
さて五つか。どうしょう……よし！決めた！！

「五つ全部決めた。今から言うぞ」

「はい。了解です」

「一つ目。ＰＳＹＲＥＮのＰＳＩの全ての能力。
二つ目。とある魔術の禁書目録の世界の超能力の全て。
この二つは劣化させんな。
三つ目。Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎのイノセンス全部。それと箱舟と奏者の資格。
もちろんシンクロ率は全て臨界点突破で。
これは好きなときに出せるように。
もちろんこれらの副作用は無しにしろよ？
あと同時使用も出来るように。
四つ目。気はラカン以上。
魔力は適当でいい。
そして最後。全ての武術や剣術などが使えるように。
そんでそのために必要な道具は暗器使いの宗像さんみたいに服に隠せるように」

「……はい出来ました。
次に行きたい世界なんですが……」

「うん。もちろんネギま」

フハハハハ！これで好き放題暴れてやるぜ！！

「あ。言い忘れてましたが、年齢や場所、その年代まで指定出来ますが」

え？そこまでいいの？至れり尽くせりでなんか悪いね。

「じゃあまず年齢は五歳。
場所と時期は……大戦の初期に適当に送ってくれ」

「了解しました。
ではあなたに神のご加護があらんことを」

そして俺の足元に穴が開いた。
穴？いや俺落ちたじゃないか！

「てめえこのヤロー！！
大事なこと言っとけー！」

そして俺は暗闇に落ちていった。

第一話：やってきたぜ！魔法世界！！つーかここどこ？（前書き）

ハーイ皆さん明けましておめでとうございまーす！
今年もよろしくお願いします！

さて俺はセンター試験まで残すところあと二週間しかないゼ☆

ま、どうだっていいや
いや良くないか

そんなことは置いといてではどうぞ（　・∀・）つ

第一話：やってきたぜ！魔法世界！！つーかここどこ？

は～いどうもみなさんこんにちは～

私は今どこにいるかと言うと～……ケルベラス渓谷に居ます。

……なんでよりにもよってここ？

これは魔獣を狩り尽くせってっていうメッセージなのか？

因みになんでこんなに悠長に構えてるかって言うとマテリアル・ハイの力で壁造ってます。

いや～それにしてもこの中で超能力が使えて良かったぜ。使えなかったら転生後一時間も保たずに死亡するところだったぜ。

いやこれはもしかするとアリカ姫救出のフラグか？

お前はここでも戦えるぞっていう。

そういえばＰＳＩは使えたが禁書の超能力は使ってなかったな。

未元物質（ダークマター）の翼出すかな。

そして実際に使ってみたが……流石は第二位って感じだった。

まあ簡単な検証は終わったところで魔獣と戦うかな。

でもこいつらの実力がわからないからどうしようもないんだがな。

そういえば座標移動（ムーヴポイント）があったな。

それで一体だけ連れてくるか。

そして今俺のマテリアル・ハイの壁一枚向こうに一体の魔獣がそしてそのさらに向こうには魔獣の群がいる。

そして今魔獣と1対1なのでひとまずやりたいことがある。

それは……

学園都市第七位の力で倒すことだ！！！

ズバァーーーン！！！

おおう！？

なんか本物のように背後から色とりどり煙が出たんだが？

これは期待出来そうだぜ！

そして俺も準備が終わったのでマテリアル・ハイの壁を一枚消す。

すると物凄い勢いで魔獣が迫ってくる。

しかし、

「すごいパーーーンチ！！」

ドカァーーーン！！

ぽかーん（゜Д゜）

……イヤイヤイヤおかしくね？
確かに全力を出したことは認めるけどさ。それでもさ、

一撃で頭吹っ飛ばすのは無いわ。
あれか？やっぱり無意識にライズ使ってたのか？

まあどうだっていいや。
あれの全力は対人は駄目だな。魔獣であれじゃあ人だと形が残るかすらわからん。

さてと、魔獣から剥ぎ取りますかな。

魔獣の鱗を手に入れた。
魔獣の甲殻を手に入れた。
魔獣の爪を手に入れた。
魔獣の尻尾を手に入れた。
魔獣の皮を手に入れた。
魔獣の棘を手に入れた。
魔獣の骨髄を手に入れた。
魔獣の血を手に入れた。

魔獣の骨を手に入れた。
魔獣の肉を手に入れた。

っとこんな感じかな？
いや違う。もう一匹狩って牙と目を手に入れなければ！
危うく忘れるところだったぜ。

よし、今度はトリックルームだな。
で、討伐するのは……あれだな。

「六幻。イノセンス解放」

さていくか。

「α⇒βアップロード」

「グォォォォ！！！」

そして魔獣が突っ込んでくるが、

「ライズ全開！遅ぇ！
飛天御剣流、龍翔閃！！」

ヤッベ！ライズ全開でやったら軽く１００メートル跳んじまった。
まあ首切り落としたからいいや。

さて剥ぎ取り剥ぎ取り。

魔獣の角を手に入れた。
魔獣の牙を手に入れた。
魔獣の魔眼を手に入れた。

さてこんな感じでいいか。

……しまった。これどう処理するか考えてなかった。
まあ箱舟の中に適当に入れとくかな。

さて、これからどっちに付いて戦争に介入しようかなんだけど……
連合で紅き翼（アラルブラ）と一緒に行動するのもいいし、帝国でテオドラにフラグ建てるのもいいし。

……あれ？今俺五歳ボディだよな？
こんなんじゃフラグ建てられないじゃないか。ｏｒｚ
俺テオドラ好きなのに…

しょうがないテンプレ通り紅き翼に付いて戦争に参加だな。

つうかあいつら今どこにいるんだ？
ひとまず情報集めながら完全なる世界（コズモエンテレケイア）をぶっ倒しとくかな。

よし。今後の方針が決まったから早速行動かな。
じゃあ最初は帝国に潜り込むかな。
連合側は後で紅き翼と一緒に殲滅すればいいし。

そうと決めたら早速箱舟で行くか。

そして俺はケルベラス渓谷を脱出した。

第二話：暗躍、そして接触

あ〜今日も今日とて疲れました。

え？何が疲れたって？

そんなの決まってんじゃないですか。

帝国側の《完全なる世界》に通じてる老害な連中の排除を行ってたんですよ。

ついでに武器商人やら拠点やらもぶっ潰してるから金も稼げますしね。

ま、そいつ等は全員生命の樹（セフィロト）でぶっ殺してミイラにしてやりました。

ついでに言うとそういうことするときって大体視覚阻害（ダミーチェック）（ついでに言うと全ての能力が最低でもｌｅｖｅｌ４はある）を使用しているため、誰かに見つかるなんてへまは一回もしてませんが。

そんなことより、いいですね。秘密結社潰すのって。

いくら金パクってもどこにも被害届け出ないんですから。

それのおかげでちょっと前まで金が貯まりすぎてだいぶ困ってましたよ。

まあそんなのは結局、方舟のゲートとテレキネシスを併用して擬似的な《王の財宝（ゲートオブバビロン）》を作って事なきを得たんですけどね。

因みに必要最低限の金額だけ残して他は貧しい村とかに寄付してますよ。

だって俺が持っててもしょうがないですし。

そしてそのついでにその辺の戦争地帯に介入して、両軍の兵士から《セフィロト》でギリギリ戦えなくなるぐらいに生命力を吸い取って両軍の本拠地に送り返してますよ。

だって自国の為に頑張って戦争してるって思ってるのに、実は《完全なる世界》の掌の上で踊らされててその所為で人が次々に死んで行くって可哀想じゃないですか。
まあ、たまにいる戦闘狂（または殺人鬼）や火事場泥棒の類の奴らは容赦なくミイラになるまで生命力を吸い取ってますけど。
そしてそのおかげで戦地にならなかった村や集落が多々あるんですがね。

そんでそんな偽善的な事をしてたらそのあたりの村とか集落（主に帝国周辺がメインで連合の地域には少ししか入ってない）からはなんか英雄扱いされてなんか恥ずかしいですけどね。

そしてそんな事してて思ったことなんだけど、よくよく考えたら俺は戦争の原因を知ってるのにどっちかに味方するのって只の殺人鬼と同じじゃないかって気付いたんで、アリカ王女とテオドラ皇女が《夜の迷宮（ノクティス・ラビリンス）》に拉致されたときに《紅き翼》に合流しようって決めたわけです。

ここで人々が殺し合っているのも止めたいところなんですが、外見五歳児がそんな事言っても誰も聞いてくれないだろうし、その所為で俺が《完全なる世界》に追い回されると戦争終結が遅れてさらに人が犠牲になりかねないので断腸の思いで見捨てるしかありません。
本当に悔しい限りです。

そしてそう決断してから数ヶ月が経過して、帝国側上層部の《完全なる世界》のクズどもを掃討し終えて新しい情報を精査しているとどうやら、アリカ王女とテオドラ皇女が遂に《夜の迷宮》に捕らわれたようなので漸く大々的な動けるようになりました。

そうと分かれば善は急げ、思い立ったが吉日とばかりに俺は速攻で《夜の迷宮》に方舟を用いて移動しました。

そして方舟のゲートを潜ると其処には数百人の《完全なる世界》の戦闘員が配備されていた。

そしてそいつ等は多分誰も近づけるなと言われていたんだろう、いきなり『魔法の射手（サギタ・マギカ）』や中級魔法を連発してくる。

そして連中は俺が魔法を使った反応が無いからだろう、一旦斉射を止めて土埃が止むのを待っているのだろう。

連中の方から「やったか？」や「あんな子供にやりすぎたか？」など自分で生存フラグを建てたり笑ったりしている。

それが戦場では命取りだと言うのに……

「ここに居て、無差別に攻撃してきたということはお前等は《完全なる世界》なんだろう。

加減はしないが死にたくなれれば引け。
“毘沙門・叢”」

そして空中に無数の、それも人数の数百倍は優に超えるだろう数の刀が現れた。

しかしあいてが俺のような子供だからか、相手は怯むどころか逆に激怒している。

「なんだ！？まだ生きてやがる！」
「誰がお前みてぇなガキにビビるか！」
「こんなもん、只のハッタリだろ！」

などと叫びながら刃や俺自身に攻撃を放ってくる。

しかし俺の方への攻撃はマテリアル・ハイで防ぎきった。

そして空中の刀には段々罅が入っていく。

「ははは！やっぱりハッタリじゃねぇか！」

一人がそう言うと周りの連中も笑い出す。誰一人としてその場から逃げずに……

「警告はしました」

俺がそう言った瞬間に刃が爆ぜた。

そしてその場に残ったのは俺と人であったと判別するのも難しい程に切り刻まれた肉塊だけだった。

流石にこんな状況の外に姫さん達を連れ出すのは気が引けるので『原子崩し（メルトダウナー）』でそこにあったものを全て蒸発させた。

しかしやはり人を殺すのは気分が悪い。

何より今回は十中八九《完全なる世界》の構成員だろうがそれでも確定していた訳ではないのだ。

だから俺はそこで頭を下げた。

そして暫く経ってから俺は顔を上げ、《夜の迷宮》へ入っていった。

「失礼致します。アリカ王女並びにテオドラ第三皇女、両名の救出に参りました」

「なんじゃお主は」
「なんだ。妾よりもガキではないか」

なんか失礼だけど気にしない。いや気にしたら負けだろう。

「いえ、私は一介の兵士です。それ以上でもそれ以下でもありません。
あなた方に名乗るなんて恐れ多い」

そういえば俺って名前決めてねぇぞ？

「バカを言うな。一介の兵士がここへ来れるものか。
貴様も《完全なる世界》の一員じゃろう」

あ～ダメだ。もうダメだ。もう切れた。
敬語なんて止めてやるもうダルい地でいってやる。

「おいこのクソ王女。
俺をあんなクソ共と一緒にするな。
それとテオドラ皇女。
お前んとこ、最近上層部が集団失踪とかしなかったか？」

「そうじゃ。というかなぜ今そんな事を聞く？」

「今から俺が何をしてきたかを説明するためだ。
じゃあこれ読んで下さい」

そう言って俺は方舟の資料保管庫から帝国上層部の《完全なる世界》に関係していた連中の資料を取り出してテオドラに渡した。

「こ、これは……」

「それを見て頂いて分かるとおり、最近失踪していたのは《完全なる世界》の関係者達です。
次にそいつ等の行方ですが……もうこの世には居ません」

「……は？」

「私が全て消しました」

「な、何を言っておる！
妾達が奴らの存在を確認したのはつい最近じゃぞ！？
こやつらがいなくなったのは随分前じゃぞ！？」

はあ、やっぱり直ぐには信じてくれないか。
つうか説得がダルい。
でもテオドラは好きだからそこまでぞんざいに扱いたくないな。
アリカはナギの嫁だからどうだっていいや。
まあ根気強く説明しますかな。

「それならばあなた達が戦争の裏などを見ようとしていなかったからでしょう。
実際に探りを入れたら直ぐに出て来ましたよ」
「嘘じゃ！妾たちが一体どれだけの人数と時間を要したと思っておる！
そんな事貴様のようなガキ一人に出来るわけが無かろう！」

つうかこいつら口調同じだから判別がムズいな。
ん？なんか電波を受信した気がするんだが……まあいいか。

「現実を認めろアリカ王女。
そいつ等が俺よりも捜査能力が低かったか、ただ単に俺の捜査能力が高かっただけだろ。
つうか今はそんなのはどうだっていいんだ。
テオドラ皇女。他にも貧しい村の生活が急に改善されたり、関係無い村や集落が戦地になりそうになった時にその周辺での戦闘が無くなった事があったでしょう。
金の方は俺が奴らの組織を潰して奪った金を渡していた。
戦闘の方は俺が兵士を戦えない状態にして本拠に送り返していただけです。
それが俺が今までにやってきた事です」

二人ともやはりかなり驚いてるな。ま、無理もないな。見た目五、六歳の子供がここまでの情報を集めて一人で組織を潰して回っていたんだからな。

「な、なぜそんなに詳しく分かっているのに誰にも報告しなかったんじゃ」

あ？報告しなかった？出来なかったに決まってんだろうが。

「アリカ王女。あなたは一般市民の感覚が分かっていないんだからあんまりそう言うことを言わないで下さい。
そうですね。理由を挙げればいくらでもありますよ。
まず第一に、こんなガキの言うことを信じる大人がいるわけがない。
仮にいたとしても話が突拍子も無いものです。
さらにそこも信じてもらえたとします。
この話をどこに持って行けばいいんですか？
例の『紅き翼』のところですか？
無理ですね。彼等は基本的に上の命令で戦地に出ています。
それもなかなか危険なところです。そんなところにこんなガキが通してもらえる筈がありません。
次に連合の元老院ですか？
戦争中にそんなガキの意見に耳を傾ける暇なんてあるはずがありません。
ですが仮に傾けたとします。ですが奴らは色々な所の中枢に潜んでいます。
そんな奴らがそんな情報を握り潰さないわけがありません。
これはどこも同じです。
これで一人で動く以外にどうすればよかったと言うのですか？
王女殿下」

かなり唸ってるな。
でもここまで言ったんだから理解して貰えたかな？

「さて、話は一旦ここで終わりです。
最後に私ですが、特にどちらに付くこともしません。
今の私には大事な人や家族なんかはいませんから、人々を多く救える方を選びます。
ついでに言うと今はあなた達と一緒に行動した方がいいと思うので協力してもいいでしょう。
ただし、私利私欲に走るゴミが出てきたら直ちに排除します。
民の為に働くと言うなら私はあなた方に忠誠を誓うでしょう。
ですが私に守りたいものが出来たら私は世界を敵に回したとしても死ぬまで守りたいものの味方であり続けるでしょう。
たとえ世界最悪の犯罪者と呼ばれようとも。
私の言いたい事は以上です」

ここまで言えば俺が敵ではないことが分かってもらえるだろう。

「親がいないと言ったな。
主は戦災孤児なのか？」

「知りません。
気付いたら一人でした。
因みに言うと五歳以前の記憶はありません」

「主はどこで気がついたのじゃ？」

「知らないところです。
ついでに言うと帝国のどっかです」

なんか二人が少し暗くなってんな。

「俺のことはどうだっていいんでこれからどうします？」

「む。ひとまず《紅き翼》と合流してから行動方針を決めようと思う」

「じゃあそれまでここにいるんですか？」

「その方が奴らも見つけやすいじゃろ」

「じゃあ私は少し奥で寝てきます。三徹してたもんでもう眠くて」

「どうしてそんなに寝てないんじゃ？」

「テオドラ皇女、それはですね、一気に叩かないと潰し残しがあると後々大変だからいけるときは最後までやんなきゃいけないんですよ。
そんで最後に新情報を確認してたらあなた方を攫ったってあったもんでここに来たんですよ。
じゃもう限界なんで、お休みなさい」

そして俺の意識は落ちていった。

第三話：ようやく会えたぜ！え？そんなフラグ建てた覚え無いんですけどーー！

そういえば容姿について説明がしてなかったんで書いときます

基本的にはは黒髪黒目顔は優しい感じの男の娘です

そんじゃ本編どうぞ

第三話：ようやく会えたぜ！え？そんなフラグ建てた覚え無いんですけどーー！

あれからどれくらい時間がたっただろうか。
ふと殺気を感じて目が覚めてしまった。
周りを見てもまだこの《夜の迷宮》の中にはアリカとテオドラしか居ない。
どうやらこの殺気は外からのようだ。

「ん？どうしたんじゃ？」

「いえ、何やら外から殺気が。
ちょっと潰して来ます」

「ちょ、ちょっと待つのじゃ！」

テオドラが引き止めようとするがどうせ危ないから止めろとか言うんだろう。
しかし俺にはそれは侮辱でもある。
この世界において俺は最強クラスだからな。

そして俺が扉を開けて外に出ると……《紅き翼》の面々ですね。どうもありがとうございます。

さて現実逃避は置いといて、まずは知らない振りをしとくかな。

「誰だお前ら。《完全なる世界》の増援か？」

「ああ？何言ってやがるこのガキ」

「待てナギ。それより君、今《完全なる世界》って言ったか？」

突っかかってきたナギをガトウが諌め話かけてきた。
たしかこいつはなかなか話がわかる奴だったと記憶している。
軽く挑発しとくか。

「あ～わかった。
お前等が姫さんが言ってた《紅き翼》とか言う連中か。
たしか俺の記憶と情報が正しければ、あのゴミ共を正面から告発しようとして、そのままあのゴミ共の策略により連合を追われた脳筋連中か」

「なんだとテメェ！」

あ～流石ナギだな。この程度で怒るなんて。
それに流石ガトウだな。こんな安い挑発には乗ってこない。
まあそうじゃないとまともに話進まないしな。

「おじさん、名前は？」

「ガトウだ」

「ガトウさん。あんなあからさまな挑発に乗る脳筋は放っといてあなたと話がしたいんですが」

「それよりアリカ王女は無事なんだろうな？」

「むしろ助けにきたんだからお礼を言って欲しいんですが」

「ハッ！何言ってやがる！
戦った跡なんて何処にあるってんだ！
お前《完全なる世界》の仲間だろ！？」

「「黙れ脳筋（黙ってろナギ）話が進まん」」

相変わらず脳筋（ナギ）が五月蠅いから先に会わせるか。

「おい、赤毛のお前。
王女殿下なら中にいるからさっさと会って来い。
あと少し話してっからお前は入ってくんじゃねぇぞ」

そしてナギは何か言い返そうとしたがガトウに止められ中に入っていった。

「さて改めましてガトウさん。あなた方が《紅き翼》でいいんですね？」

「ああ、そうだ」

「じゃあこれを」

そう言って方舟の資料庫から《完全なる世界》関連の資料をガトウに渡す。
勿論コピー済み。

「こ、これは！」

なんか愕然としている。
オッサンがこの程度で動揺すんじゃねぇよ。

「これは君が調べたのかい？」

「そうですが」

「失礼だが君はいくつだい？」

「見たまんまの五、六歳ですけど」

ゼクトと違って俺は見たまんまだよ。肉体年齢はな。精神年齢は十代だ。
……楽しむために不老にしてもらうべきだったか？

「一人でこれを？」

「そうです」

なんか頭抱えてるよ。やっぱりこいつらはあいつ等のことをまだ調べ切れてないのか。
そんで俺の方が一人でっていう所にも驚いたんだろう。それに年齢も見た目どおりと。

「いつのまにこんな量を一人でここまで調べたんだい？」

「あんたらが戦争で《完全なる世界》の掌の上で踊らされて人殺ししてるときですよ連合の英雄様方。
確証はありませんが戦争の原因を作ったのさえも奴らの仕業だったんじゃないでしょうか。
あなた方が真に英雄と呼ばれる者ならもっと流れる血は少なかったでしょうに」

俺がそう言ったらガトウは押し黙ってしまった。

少し強く言い過ぎたかな。

「それにしても一体どうやって調べたんだい？」

しょうがない『視覚阻害（ダミーチェック）』ｌｅｖｅｌ３ぐらいで発動すっかな。

「いいですけど鏡とかありますか？」
「俺は持ってないな。
そうだ、アル。ちょっと来てくれ」
「何でしょうか？」
来やがったなこの変態野郎。なんか目がコスプレさせたい的なことを訴えかけてくるのは何でだ？
そんな事を考えている内にガトウは鏡をすでに借りていた。
「じゃあ能力を使います。
鏡の角度を調節して鏡越しでも見えるようにしておいて下さいね」
「わかった」
「じゃあいきますよ」
そして俺は能力を発動させた。
そして二人は案の定かなり吃驚してる。
この人鏡越しに見てないな……
「ガトウさん。鏡越しで見て下さい」

「あ、ああ」

そして鏡越しに見てまた驚いている。
正直、今日で見飽きる位この人の驚く顔を見たぞ。

「もう能力を解きますよ」

「わかった」

軽く説明中

「というわけでまああんな風に潜入したり糸を使って盗聴したりしましたよ。
そんで発覚した奴は情報を取れるだけ取ったら始末しましたけどね」

そしてガトウはまた息を呑んだ。
なんか変なこと言ったか？

「かなり手強い奴もいたと思うんだが」

「権力者って必ず女に行き着きますよね」

この一言で察してくれたらしい。

よかった、詳しくいう必要がなくって。
まあ正面からでも負ける気はせんがな！

「これでその資料のことは信用してもらえましたね」

「ああ。直ぐに対処しよう」

「は？何を言ってるんですか？
それは処分が終わった連中の分ですよ」

「え？」

「未処理の情報はこれですよ」

そして俺はさっき渡した書類の約二倍の量の書類を渡した。まあ連合側はまだ手を出してないから大分残ってるからな。
なんかもうこのオッサン呆れてるような気がする。

心なしか「ここにも新しいバグキャラが……」って言ってる気がするんだが。
見た目五歳児に言う言葉じゃ無いだろ。
あと俺のことはバグキャラじゃなくてチートと言え。

「そういえば中にいた時に外から殺気がしたんですけど、あなた方ですか？」

「ああ、外に兵士が居なかったからな。

少し警戒していた。
それより殺気は抑えていたと思うんだが？」

「暗殺者が殺気や闘気に気付けない訳がないでしょ。
少し漏れた殺気でも気付けますよ。
というか気付けないと暗殺を失敗しますし、もしそうなら俺は既に指名手配犯になってますよ」

ああまた呆れてる。
つうか遂にため息まで吐きやがった。

「ひとまず私が言いたいのはここまでです。
それより王女様にお話して来た方がいいのでは？」

「ん。そうだ。流石に此処での長話は拙いから今から私達の隠れ家に行くんだが、君も来るかい？」

「ん～一応今後の事もあるのでご一緒しましょう」

そうして俺達は《夜の迷宮》を後にした。

そして《紅き翼》＋姫様方＋俺で《紅き翼》の隠れ家のあるタルシ

ス大陸極西部オリンポス山にやって来た。

「何だ、これが噂の《紅き翼》の秘密基地か！
どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

あ～ついて早々、原作通りのセリフ。本当にありがとうございます。
つうか隠れ家が豪華だと問題があると思うのだが。

「テオドラ様、普通秘密基地というのは見つからないように地味にするものです。
それにこんな辺境の地で豪華な建物を建てれば奴らに直ぐに嗅ぎつけられるでしょう」

「そういうものなのか？」

くうっ！そんなに可愛らしく小首を傾げるな！
俺が好きなのは大人のお前であって……
このままだとロリに目覚めちゃうじゃないか！

落ち着け、落ち着くんだ。
いつも通りのテンションでいくんだ。

そして俺達が色々会話していると何処からか生暖かい視線が……
やっぱり五歳児ボディの所為か？

いや気にしたら負けだから無視しよう。そうしよう。

そして俺が現実逃避していたらナギとアリカの会話が佳境に差し掛かっていた。

「世界全てが敵――
良いではないか。
こちらの兵はたったの八人、だが最強の八人じゃ。
ならば我等が世界を救おう。
我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「……へっ。
（だから俺は魔法使いだっつうーのに……）
やれやれ。
相変わらずおっかない姫さんだぜ。
いいぜ。
俺の杖と翼、あんたに預けよう」

そして跪いたナギの肩にアリカが剣をのせる。
その瞬間に、正に狙ったかのように太陽が山から顔を出し辺りを照らす。

その様はあまりにも幻想的だった。

……あれ？これって俺数に入ってね？

まだ仲間になるって言った覚えはないんだが。
つうか指名手配犯の仲間になるってどうよ？指名手配される前ならまだいいけど。
つうか話しかけようにも今話したら明らかなＫＹじゃんか。

「ん？おい姫さん俺たち七人組だぜ？
もう一人は誰だよ」

お！流石ラカン！見事に空気をぶった切りやがった！流石だな！
まあそこに痺れも憧れもせんがな！！

「おい姫さん！まさかあのガキを仲間にするって言うのか！？」

「不服か？奴はお主らよりも《完全なる世界》に詳しい上に、主らよりも早く妾達を救出にきたんじゃぞ？」

ダメだよアリカ姫様。それ明らかに決闘フｒ
「おいお前！俺たちの仲間になるんなら半端な奴はいらねぇ！
俺と勝負しやがれ！」

はいやっぱりフラグ建ちました～
まあ一回は戦いたいって思ってたけど、このテンションは嫌だな。

「アリカ王女、なぜ俺は仲間になることが決定してるんでしょうか？」

「む？《完全なる世界》を相手にするには大勢いた方がいいではないか」

「まあその考えは悪くないんですが、今まで俺が奴らに顔が割れないようにしてきたのになんでいきなりこんなばれるばれない考えずに突っ込んでお尋ね者になる連中の仲間にならなきゃいけないんですか」

「なんじゃ妾達と来るのは嫌なのか？」

クソッ！テオドラめ、そんなに可愛らしく聞くんじゃねぇよ。
マジでロリに目覚めかねないからヤメレ。

「いや、別にそういう訳じゃないんですけど、ただ形だけでもお尋ね者の仲間になりたくないんですよ。
それ以外に何か方法があるなら、それでいいですけど」

「ならばお主を妾の護衛として雇う！
それでいいじゃろ！？」

「ああ、そういう形ですね？
それならいいですよ」

そしてその瞬間おれの今後が決まった。

しかしやっぱり馬鹿（ナギ）は空気を読まない。
いや読めないのか？

「だから勝負しろって言ってんだろうが！」

全くもって五月蝿い。
つうかお前、自分が戦って出る周りへの被害について考えたことあんのか？
まあいいや。瞬殺してくれる。

「しょうがないですね、そこまで言うのならやりましょうか。
勝敗は気絶するか、ギブアップするかでいいですね？」

「ハッ！ようやくやる気になったな！
一撃で決めてやるぜ」

そして今俺たちは対峙している。
姫様達は《紅き翼》の面々に護ってもらうことになった。
まああそこまで被害が出る前に片をつけるつもりだが。

「さあ。始めましょうか。

あなたは魔法使いでしょう？
先手を譲って上げますから大呪文でも放ってみてください」

「ハッ！舐めやがって！
死んでもしらねえぞ！

百重千重（ヘカトンタキス・カイ キーリアキス アストラプサトー）と重なりて走れよ稲妻
『千の雷（キーリプル・アストラペー）！！！』」

はあ～いくら先手を譲ったし大呪文でも来いって言った。
でもだからって見た目五歳児に向かって撃っていい技じゃないと思うんだが。
ああそうか。あいつの周りは見た目通りの年齢じゃない奴がいるからそんなに深く考えないのか。
（この間０，１秒）

そして俺は当たる瞬間に気配をすべて絶ってナギの背後にテレポートする。
ちなみにダミーチェックは発動中。

このまま電気で昏倒させっかな。

「なんだあのヤロウ。
全然大したことねぇじゃねぇか」

ブチッ！！

もう怒った。このヤロウ本気で殺しちゃる。

「（ライズ全開。気もＭＡＸまで溜まったな）
おいお前。いつまでよそ見してやがる」

「ハッ！やっぱりそうじゃねえと面ｓ
「うっせ。もう喋んな。

『二重の極み』！！！」

咄嗟のことで障壁は間に合わなかったのだろう、気だか魔力だかの身体強化だけしか出来ていなかった。
しかし『二重の極み』は破壊の極意。いくら硬くなろうがそんなもの問題ではない。
現に今、ナギの腹には風穴が空いている。

そして当のナギ本人も俺があいつに触れた瞬間に体内電気を弄って昏倒させたため悲鳴すらも上げずに意識を手放した。

そしてここに決闘の幕が降りた。

そして俺は残りの連中のいるところに向かってナギを担ぎながら空を跳んで行った。

なんかラカン以外の《紅き翼》のメンバーの目が怖いんだが……ラカンだけは俺も戦いてぇって目だし。
つうかよく見たら皆臨戦体勢じゃないっすか。
なんか完全に殺気飛ばしてきてるし。
……あ、そっか。今のナギって腹に風穴開いてっから殺したように見えたのかな。
しょうがない、誤魔化すか。

「いや～最強だと天狗になってる奴って油断しやすいですね。
それに始まる前にも挑発しといたから虚を突くのが簡単でしたよ」

「そんな事はどうでもよい。ナギは生きとるのか？」

ああ、姫様までご立腹だ。なんか完全に俺が悪者じゃないっすか。
ぶっちゃけこの程度、正当防衛で通ると思うんだが。
まあ早く回復させないと危ない事には変わりないから治療してやっか。

「大丈夫ですよ。ちゃんと生きてます。
今から治療するんで残りの皆さんは殺気を抑えてください。集中できません」

「お前なんかに任せられる訳がないだろう！
それはここにいる奴らが治せる怪我じゃないんだぞ！」

やっと詠春が喋ったと思ったらそんなことかよ。
お前等の回復魔法ってショボいな。
俺のキュアにかかれば心臓と脳さえ残ってれば完治出来んだよ。
少し黙ってろよ生真面目剣士。

「別にそんな事言うんなら協力なんかせずに今すぐこいつぶっ殺してもいいんですよ？
俺がその気になれば《夜の迷宮》にいた奴らと同じ様に跡形も残さず蒸発させてしまえるんですから」

《紅き翼》は俺の言ったことに驚いたようだが、まだ殺気を向けてくる。
本当にうっとおしい。

まあいいや。此処でこいつに死なれたら物語が有り得ない方向に向かいかねないからしっかり治療してやるか。

「もう何も言いません。
今から治療に入りますが邪魔しないで下さいね」

それだけ言うと俺はキュアを発動させて治療を開始する。

そして驚いたことに一時間はかかると思われた治療時間がたった十分で終わってしまった。

流石はバグキャラの生命力だなと思った瞬間だった。

そして俺は治療し終わったが未だ気絶中のナギを《紅き翼》の連中に渡し、キュアを使って疲れたから方舟の食糧庫から適当に肉を取り出して『発火能力（パイロキネシス）』を使って焼いて食っていた。
何分キュアは相手に生命力を与えるようなものだから疲れ方が他の能力に比べて半端じゃない。

渡す時にもひと悶着あったが、割愛。

それにしても『二重の極み』の威力、半端じゃなかったな。
やっぱりライズと気の併用は危険すぎるな。
これからは人には使わないようにしなくては。……殺し合い以外では。

そして俺が飯を食いながらテオドラと話していたら起きたナギに上から目線で仲間になる事（協力関係になる事）を許可された。
そん時に切れかけたのはご愛嬌って事で。

「そういえばお前の名前って聞いてなかったな。
なんて言うんだ？」

……そういえば俺ってこの世界に来てから名前いう機会なかったから名前考えてねえや。

「ナーヴァです」

「今の間はなんだ？」

突っ込まないでくれ。

「気のせいです」

「お前偽名言った訳じゃないだろうな？」

そんな訳が無いだろうに。

「違いますよ？」

「でも明らかに今考えた感じだったぞ」

こいつこういう時だけ無駄に鋭いな。

「今考えたことは確かですよ」

「やっぱり偽名じゃねえか！」

五月蝿えなこのやろう。

「これはこの前姫さん達にも言ったんですが俺には五歳以前の記憶はありません。
覚えていたのは俺の年齢と自分の力の使い方、後は言葉の使い方だけです。
名前は覚えてません。だから今付けました。なにか文句でも？」

ま、殆ど嘘だけどな！

「そうだったのか。
疑って悪かったな！
これからよろしくな、ナーヴァ！」

「こちらこそよろしく。
まあでも俺は《紅き翼》の仲間じゃなくてテオドラ様の護衛って立場なんでそこんとこしっかり覚えといて下さい」

「あ？なんでんなメンドイ事すんだ？」

「あんたらが正式にはお尋ね者だからですよ」

これ、俺何回言ったっけ？

「ふ～ん、まあいいや。これからよろしくな！」

そして俺は《紅き翼》と正式に協力関係になった。

これからは本格的に《完全なる世界》をぶっ潰しますかな。
出来るだけ俺は表に出ないようにしながらね。
表に出てメガロメセンブリアに目を付けられたらたまったもんじゃねぇからな。

第四話：最終決戦！！

あのあと細かいことが少しあったけどまあ省略。
俺も正式に《紅き翼》と協力体制に入った。

その後俺達は頭脳労働担当と肉体労働担当に別れて敵味方の識別、その後殲滅を繰り返した。
そんな中ヘラス帝国の《完全なる世界》の連中は殆ど俺が駆逐しといたからこっちはあっと言う間に終わった。
しかし連合側やその他の所では俺があまり手を着けていなかったためかなり時間がかかった。

そして俺はというと、頭脳労働担当だけかと思いきや、怪しいところに潜入して黒と分かったらそのまま内部から殲滅していくという、一番肉体的にも精神的にも脳的にも（超能力の連続使用のため）キツい仕事の担当になってしまった。

まあそれでも相手には素顔以前に姿すら相手に認識させないほど完璧にこなしていった。

最終的には原作では映画なら、三部作単行本なら１４巻分くらいは行くであろう六ヶ月の死闘のところを、俺の活躍と以前からの暗躍のおかげで映画なら二部作、単行本なら１０巻ぐらいの四ヶ月の死闘になってしまった。

ちなみにこの間に俺は六歳になった。

この位の年の一歳は大きいな。
なにせ結構身長が伸びたからな。
ついでに体内の成長ホルモンをちょっといじって不相応なくらい、つっても九歳のくらいの身長になってます。

まあそんな事はさておき遂に奴らの本拠地を突き止め追い詰めた。
（原作知識と違いがあったら困るので正式な結果が出るまでちゃんと調べた）
そしてその本拠地は原作通り、世界最古の都、王都オスティア、空中王宮最奥部、《墓守り人の宮殿》だった。

そして今、《紅き翼》からはナギ、ラカン、アル、詠春、ゼクトがいて、後は帝国・連合・アリアドネー混成部隊と共に《墓守り人の宮殿》の近くに集合している。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。
悪の組織なんてそんなもんだ」

「いや、そんな考えしてる方がなめてるって。
それにナギ。お前は同じ様に俺をなめてて瞬殺されてんだから今回はそういうことにはしっかり気をつけろよ」

「つーか手前！
なんであれから勝負しやがらねぇ！
俺は負けっぱなしは嫌いなんだよ！」

馬鹿かこのやろう。
俺が参加してからは《完全なる世界》の連中を潰してたんだからそんな暇なんて在るはずが無いのに。
全くしょうがねぇな、この戦闘狂（バトルマニア）は。

「分かった。
この戦いでお前がちゃんと生き残れたら、怪我が完治した後本気でやってやる」

「絶対だぞ！？
その言葉忘れんなよ！」

「お、楽しそうじゃねぇか。そん時は俺も混ぜろよ」

出たなこのバグキャラ二号め。
そんでもってお前も戦闘狂（バトルマニア）なんだよな。
めんどくせぇ。

「わかったよ。
そん時はお前も相手してやるよ。
つうかお前等は組むなよ？
バグキャラ二人なんて絶対に勝てねぇんだから」

「んなもんわかってるっつーの。
やるからにはやっぱり正々堂々だろ！
そうじゃなきゃ面白くねぇからな！」

そんな感じで俺達がバカ話していると、若かりし頃のセラスがやって来た。

「ナギ殿！
帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう。
しっかり頼んだぜ」

「ハッ
それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おあ？
ああ、いいぜそれくらい」

「そ、尊敬していました」

そしてその後ガトウから通信が入る。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。
帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。
決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。
世界の鍵、《黄昏の姫御子》は今彼等の手にあるのです」

さてこのままだと皆突っ込むだろうな。

「おいナギ。俺は外の奴らを潰してるからお前等が中のラスボスを潰してこい」

「へっ！
今さら怖じ気づいたってのか！？」

「ちげぇわバカたれ。
お前等でやっと倒せて俺が行ったら余裕が出来るレベルの敵だからな。俺まで中に入る必要は無いだろう。
俺は外の連中に被害が出ないように奴らを殲滅する。
それとも何か？自分達だけじゃ不安だからお前も来いってか？」

それに原作でもギリギリ勝てたんだから今回もいけるだろ。
俺はここで犠牲者を０にする。

「んじゃ、派手に一発かましますかな。
いくぞ。『日輪“天墜”』！！」

そして俺達の目の前から《墓守り人の宮殿》までの間にいた敵を凄まじい光が蹂躙していった。

「よし。後はお前等、中のクソッたれ共をぶっ倒して来い」

「へっ！言われなくても分かってるっつーの！
野郎ども、行くぜ！！」

そして《紅き翼》の面々は《墓守り人の宮殿》に突入していった。

「さて、セラスさん俺が今から魔法で光る木を《墓守り人の宮殿》の周りに展開させますから他の人を近づかせないで下さい。
近づいたら死にますから。
あなた方はその木を越えてきたのだけ相手していて下さい」

そして俺も《墓守り人の宮殿》に近づいていく。
その際、なんか後ろの方で何か言っていたが気にしない。

そしてまず《墓守り人の宮殿》の周りをマテリアル・ハイで囲む様に展開させる。

「さて、根ずく地面も用意出来たし本気でいきますか。
『生命の木（セフィロト）“峻厳（ゲブラー）”』！！！」

すると周囲には世界樹クラスの大きさに生長した幾つもの光る木ができた。
そしてその隙間はなく超巨大な生垣の様になった。

相手はその木を壊して外に出ようとしたのか、次々と木に向かって飛んでいく。
しかし《セフィロト》は相手の生命を感じて枝を伸ばし次々と串刺しにして相手の生命力を吸い取り、倒してゆく。

「さて、壁も作った事だし俺も行くかな。
まずはこいつだ！
『パイロキング・サラマンドラ（使用者が男のため、クイーンからキングに変更）』！！
焼き尽くせ！！」

すると津波のような巨大な炎を敵の密集地帯に放ち、次々に灰にしていく。

「まだまだぁ！
『原子崩し（メルトダウナー）』！！」

今度は太い白く輝く光線を四方八方に照射したかと思えばその先にいた奴等が次々と蒸発していく。

その後も能力をフルに使い敵を殲滅していると突然《墓守り人の宮殿》が崩壊を始めた。
そして少しすると《墓守り人の宮殿》の中心から巨大な光球が発生していく。

するとメガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦と帝国軍北方艦隊が間に合い、光球を押さえ込む事に成功した。
そしてこの瞬間、実質的に世界は救われた。
皆の力によって。

第五話：オスティア崩壊（前書き）

ヤバいよ～
センターまであと5日ぐらいしかないよ～
とか言いながらこんな事をやってたりして、俺は本当に何がしたいんだろう？

まあいいか
この作品を読んで皆さんが喜んでくれたら幸いです
ではどうぞ（　・∀・）っ

第五話：オスティア崩壊

《墓守り人の宮殿》での決戦の翌日、連合と帝国が停戦合意し即、記念式典が開かれた。
場所は王宮から遠く離れた離宮で行われている。

そして記念式典には生き残った《紅き翼》の面々と俺が招待されていた。
まあ結局俺とアルはサボらせていただいたがな。

ちなみにラカンの両腕は式典が始まる前、俺がサボるために姿を眩ます前にキュアで治しておいた。
やっぱりこいつの生命力もバグなのか、一時間もかからずに完治（腕だけ）した。
なぜ腕だけかというと全身回復させようものなら直ぐにでも勝負を挑まれそうだったからだ。
あいつのことだから式典のデモンストレーションとか言って戦わせかねない。

そして俺は式典中何をしていたかというと、離宮島に方舟のゲートを用いてオスティアの市民を移動させている。
これで少しでもこの後のことが楽になればまだいい。

その間にこの後のために酒場で飯を食っていると式典からラカンと詠春が、しばらくしてナギも帰ってきた。
そして帰ってきて早々ナギとラカンがどつき合いをするといういつも通りの光景が展開されていた。

「つーかアルにナーヴァ！
てめぇ等なんで受勲式出ねぇんだよっ！？」

「私、上がり症なもので……」

「嘘つけーッ！
でお前は！？」

「人前に面晒したくないだけだよ」

「おま！その程度の理由かよ！？
なんかテオドラが落ち込んでたぞ！？」

あれ？そういえば今って形はテオドラの護衛だったっけ。
ちょっとやっちゃったかな。

「ん。わかった。今度謝っとくわ。
それよりも俺これからちょっと用事があるから出かけてくるから」

さて、ナギも帰ってきたからそろそろオスティアの崩落が始まっちまうかな。
俺がいる限り犠牲者は出させねぇぞ。

そして俺がオスティアに転移すると次々に島や岩が崩落を始めていた。

「クソッ！もう少し早く来ればよかったか！
まあいい！
今まで集めてきた生命力をここで使い切るかも知れねえな。
『生命の門（セフィラ・ゲート）』、開門！！！」

すると崩落していく島を支え始めた。

「駄目だ！これでも数がたりねぇ！
『マテリアル・ハイ』全力展開！！」

そしてこれでようやく人の住んでいる島の崩落を止めることが出来たが、まだ岩が住民に降り注いでいる。

「これじゃ全然足りねぇ！！
『ラウ・シーミン』、イノセンス発動！
『オルガゥス』！
行け！住民を落石から守って来い！！」

そして獣二匹を街に放ち、住民を守らせる。

「急がねぇと不味いな。俺も住民を守らなきゃ」

そして俺はテレキネシスで岩を受け止め、誰もいないところに投げ飛ばしていく。
そして安全になった住民はすかさず方舟のゲートを展開して転移させていく。

すると俺の元に通信が入ってくる。相手はアリカだった。
通信機は置いて来るべきだったか。

「なぜじゃ！なぜお主はここにいる！お主も早く安全なところへ逃げんか！」

「黙ってろ！！
今俺がいなくなったらこの島の全てが落ちるんだぞ！
俺をどっかにやりたければさっさとオスティアの全住民を避難させろ！！」

「馬鹿な！！ここは今魔法が使えんのじゃぞ！？」

「知ったことか！！
俺に常識は通用しねえんだよ！！
俺に構ってる暇があんなら一人でも多くの民を救え！！」

そんな会話をしていると通信に割り込みが入った。

「ゴルァーッこんのバカ共！！
やいアリカてめぇっ！！
どういうこったコレは！？」

「ナギ……
見てのとおりだ。
世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。
案ずるな。妾もいずれ、遠からぬうちに地獄へ堕ちる」

「なんで話さなかったこの唐変木！！
それにてめぇもだナーヴァ！！用事ってのはコレのことだろ！？
なんであん時に分かってたのに俺たちに言わなかった！！」

「戦うための魔法しか覚えてないお前に何が出来るって言うんだ、
このバカ！
自分に出来ることと出来ないことをしっかり理解しやがれ！」

「くそッ……今からそっちに向かう！
待っとけてめぇ！」

「ここにそなたの力は必要ない！！
妾を助ける暇があるのなら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を
要請する！！
ただしこの魔力消失現象の中ではそなたも満足に飛べまい。
我らの逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪紋処理を施してある
！それを……」

「もう乗ってるよ！！」

「ならば良い。
では救出活動に全力を尽くした後、そなた達はそのままここを去れ。
二度と戻るな。最後の命令じゃ」

「何！？そりゃどーゆー……」

「切るぞ。この通信の間にも民が死んでいく。
ナーヴァ、そなたもじゃ。
通信終了」

「へ、陛下しばしお待ちを！！
アルビレオ・イマ！聞いていますか！？クルトです！！」

「ハイ何です？クルト君」

「アリカ様のおっしゃる通りにするのが賢明かと思います！
もし戻れば……あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性
が高い！！
今は身を隠してください！
時が経てば事態は好転する筈です！
とにかくコレが終わったら逃げてください！！
いいですね！？」

「わかりました。ナギのことはお任せを」

「スミマセンナギ……
これがアリカ様のお望みでもあると思いますので……」

「……！」

「そなた達には世話になったな。さらばじゃ」

「アル。俺も多分戻れそうにねぇからテオドラに謝っておいてくれ。護衛の契約、勝手に破ってすみませんでしたって」

「陛下もナーヴァも御武運を」

そして俺は通信を切り、目の前の住民を浮遊岩や倒れてきた建物から助けそのまま方舟に転移させていく。

そしてどれほど時間が経っただろうか、全ての島からオスティアの住民を避難させる事が出来たようだと通信が入ってきたので能力を解除するためにアリカ女王達の乗っている艦隊を被害の被らない場所まで下がらせた後、島を一つずつテレキネシスを使って降ろしていく。

そして最後の一つを降ろしたところで俺の最後の力を振り絞ってアリカ姫の乗っていた艦に転移し、そこで意識を手放した。

第六話：投獄（前書き）

今回は今までで一番短いです

でもなんか微妙に区切りがいいからここで切りました

ではどうぞ（　・∀・）つ

第六話：投獄

「ふぁ～～ん、よく寝たな。ん？よく寝た？
なんか点滴用の管がついてるし。
……あれ？なんか見た感じ牢獄なんだけど、俺なんでここにいんの？」

「目が覚めたか」

「あ、アリカ様。ここってどこですか？なんか見た感じ牢獄なんですが。
後俺はどれくらい眠ってましたか？」

ん～なんかこれに似たシーンがどっかにあった様な気がするんだけど……ダメだ、思い出せん。
後俺ってここに来る前何してたんだっけ？

「お主はオスティア崩壊の日に我が民を救った後眠り続けていたのじゃ。
今日はあれから三ヶ月ぐらい経った頃じゃ」

あ～完っ全に思い出した。
これはあれか。アリカがメガロメセンブリアの元老院の連中に嵌められてケルベラス無限監獄とかいうところに放り込まれてる時か。
そうすっと俺は共犯者ってことで捕まったな。

「アリカ様。あの日の被害状況とその後について出来るだけ詳しく教えてくれませんか？
もちろん言いたくないところは言わなくても構いません」

「いや、お主がここにいるのも妾の責任じゃ。全て話す」

そしてアリカは今までにあったことを話していく。

オスティアの民の死者は奇跡的にも出なかったが、負傷者は多数出てしまった事。
王国は災害復興支援の名目で派兵されたメガロメセンブリア軍によって実効支配されてしまった事。
その民は難民となり各国に受け入れさせた事。
アリカはメガロメセンブリア元老院の手によって罪を着せられ投獄された事。
そして二年後に処刑が決定している事。
俺に関しては崩壊が終わった後、アリカの乗っていた艦に転移してすぐ気絶したため、病院に搬送されしばらく入院していたが、アリカがメガロメセンブリア元老院に嵌められたのと時を同じくして俺もアリカの共犯者として捕らえられた後すぐに二年後に処刑が決定。
そしてそのままの状態でここに投獄された事。

「すまぬ……妾の所為でお主まで……」

「あ～、アリカ様。そんなに気にしないでください。
別に自分の命が惜しければあの場所に行ってませんから。あの場所に行った時もこの事はある程度覚悟していた事ですし。

それに俺が今まで顔を公衆の面前に出さなかったのだって周りの連中に非難が行かないようにするためだったんですから」

「お主はこれから処刑されるのじゃぞ！？
それでもそんなこと言えるのか！？」

処刑ってどうせあれだろ？あの魔法も気も使えない魔獣蠢くケルベラス渓谷に落とすってやつだろ？
俺は一度あそこから無傷で生還してんだから、あそこに落ちても今回もなんの問題も無く生還出来るんだけどな。

「アリカ様、あんたは俺の事を勘違いしている。人生が本当に正しい事をしたのに殺されるのと、嘘偽りを並べながらも生き残るの二択だったとしても俺は最後まで正しい事をして死んでいく方を選ぶ。簡単に言えば誇りをとるか命をとるかですが、誇りを捨ててまで生きたいとは俺は思わないんですよ。
そんな事をすれば誰かの言いなりに動く人形となんら変わり無いんですから」

一度目の人生の時はどうだったか忘れたけど二度目の、おまけの人生まで誰かの言いなりになるなんて絶対に嫌だからな。
この人生では俺のやりたい様にやってそして死んでいくって決めたんだ。
そのためだったら俺の害になる奴だったら排除するし、俺だけじゃなく世界に害なす奴は一切の慈悲なく葬ってくれる。

「しかし妾は……」

「あ～何時までもそんな顔してないでくださいよ。
これは俺の人生なんだから俺がどう死のうがどう生きようが、全部自分の責任なんですから俺の事は気にしないで下さい」

原作のアリカって投獄されてる時ってこんな感じだったっけ？
確かずっとナギの事考えてたって言ってた気がしたんだけど。

……ただあん時って誰とも会ってなかったからか？
いや、あん時は間接的に殺してしまったことはあっても、本人の分からないところでだったからで、今回は俺が《紅き翼》の次に近しい人物だったからってところかな。

つうか牢屋を同じにしてアリカを罪悪感に苛まれる様に仕向けるとか、本当に元老院の連中は腐ってんな。
俺の処刑が終わったらお礼参りしてやらなければ。

それ以前にわざわざ処刑されなくても『心理掌握（メンタルアウト）』の記憶改竄と、クサカベさんの電子機器に干渉出来るＰＳＩがあれば処刑の偽装なんて余裕で出来るんじゃないか？

それ以外にも方舟のゲートを使えばこっから簡単に脱獄出来るんだし。

なんかそう考えたらなんか余裕な気がしてきた。

いや、そんな事しちゃダメだ。
そんな事をしてしまったらナギとちゃんとくっつくか微妙だし、くっつかなくてネギが生まれてこなかったらこの先がカオスになっちゃう。
しょうがない。ここは素直に処刑されてやりますか。
まあ奴らの思い通りになるのは崖から飛び降りるまでだけどな！

二年後に待ってろよ元老院。
自分の保身しか考えていない老人なんて世界の害にしかならないんだから俺が駆除してくれるわ！！

第七話：処刑？何言ってんの？魔獣狩りじゃーー！！（前書き）

今回は完全にノリで書きました

いや～やりすぎた感は否めませんがまあ大丈夫でしょう

そんなわけで第七話どうぞ（　・∀・）つ

第七話：処刑？何言ってんの？魔獣狩りじゃーー！！

あれから約二年が経過し、俺達の処刑まで後二週間を切った。
そしていつも通り衛兵が食事を下げに来た。

「なんだよ、また食べなかったのかい女王様。
ったく死なれるとこまるんだがなー。
庶民のお味はお口に合わねぇってか。
へ……今のアンタにゃお似合いだな。
それに比べてこのガキはよく食うな」

「あたりまえだろ。
俺は八歳だぞ？まだまだ成長する年頃なんだよ。
つうか処刑の時の映像って放送するんだろ？
俺の顔が公衆の面前に出るってのにチンチクリンなガキじゃしまらねぇだろ」

「うっせぇぞガキ。
それにしてもアンタらが戦争を引き起こした張本人だろ。
アンタらに味方する人間はこの世にゃいねぇ。
全く……いい気味だよ」

そんな事言ってっけど実際は方舟の食料庫から食材を取り出して腹一杯美味いもんを食ってんだけどな。
それにしても方舟の中の食料が腐らないってどういう原理だ？
でもなんか気にしたらいけないような気がするな。

あ、そんな事よりも俺八歳になりました！
身長は大体１５０センチ位になりました！
体内のホルモンバランスを弄ればこんなにも早く身長が伸びるなんて思いもしなかったぜ。

え？なんでシリアスっぽいところからいきなりふざけてんのかって？
最近、言い方は悪いけどアリカが廃人みたいになって退屈だったんだよ！

あ！ごめんなさい！ちょっとふざけ過ぎました！ちょっ！痛い痛い！止め！俺が悪かったから石投げないでー！

「あっ、これは議員……こんな辺境にわざわざ！」

「うむ。ご苦労だね。
下がりなさい」

「し、しかし！」

「大丈夫だ。話は通してある」

あ、来やがったなこのクソヤロウ。今すぐにでもぶっ殺してやりてぇ！

「これはこれは……
見るにも耐えぬみすぼらしい姿ですな。
最古の王家の末裔にこのような仕打ち……まことに心が痛みます」

……あれ？俺今『視覚阻害（ダミーチェック）』使ってない筈なのに明らかにいないものとして話が進んでるぞ？
このヤロウ処刑が終わったら覚えとけよ。お前にはこの世の地獄を見せてやる。

「刑の執行は十日後と決まりました。
――その前に今一度お尋ねしましょう。
黄昏の姫御子と共に封印された墓所の最奥部、そこに致る方法を貴女は知っているはずだ」

ぷっ！無視されてやんの！マジウケるこのオッサン！

「言うのです！！
これは世界を滅びから救う為でもあり、最愛のアスナ姫をお救いする為でもあるのですぞ！？」

囚人相手だからって手をあげてんじゃねぇよ。
……ダメだあのヤロウは地獄を見せるだけじゃすまさねぇ。社会的に、精神的に、肉体的に、最低三回は地獄を見せてやる。

「フン……使えぬ女だ。
いや失礼。これは言い過ぎました。
貴女は十日後の死によって充分に世の中の役に立つことになるので

したな。
そう――――世界平和の礎として」

そしてあいつは帰っていった。
つうかマジで俺は無視か。
まああんなゲスには話しかけられたくないがな。

そして十日後。
遂に俺達の処刑執行日当日になった。
なんか元老院議員がなんか前口上を言っているがそんな事はもうどうだっていい。
そして俺達が穴に突き出た橋に立つと後ろから兵士が催促してくる。

「フハハハ！それでは諸君、サラダバー！」

そして俺はアリカよりも先に落ちて行く。
早く魔獣をぶっ殺さないといけないからな。
それにしてもやっと大っぴらに能力が使えるぜ！
テンション上がってきたーー！！
なんかテンション上がりすぎて変なことを口走っていた気がするけ

ど気にしない！！

「フハハハ！！！
三年ぶりだな魔獣の諸君！！！以前と同じ様に俺にぶち殺されるがいい！
ライズ全開！！くらえ！！
『流星ブラボー脚』！！（ちなみにこの時ナンバーセブンの超能力も併用）」

それが魔獣達に当たると次々と粉砕して絶命させていく。
そして俺が地面にぶち当たると、そこには巨大なクレーターが出来た。

「絶☆好☆調！！！
まだまだいくぜ！『パイロキング・サラマンドラ』！！
焼き尽くせ！！」

そして俺を中心に火の塊の化け物が出現したかと思ったら、周りを炎の海に変え、そこにいた魔獣達を炭どころか一気に蒸発させていく。

「次！『氷碧眼（ディープフリーズ）』発動！！」

そして俺の手には氷で出来た槍が二本握られている。

「食らえ！！ゲイ・ボルグ！！！（ノリで言ってるたけです。あしからず）」

そして放たれた氷の槍は魔獣を何匹も貫いて絶命させ、槍は壁に当たるとその周辺を氷付けにしていく。
もちろんその周辺にいた魔獣は凍り付いて絶命していく。

しかし魔獣もやられっぱなしで終わる訳がなく、背後から奇襲を仕掛けてくる。

「フハハハ！
俺からは全方位に電磁波が放射されてんだ！！
死角なんかあるわけがねぇだろうが！！！
『未元物質（ダークマター）』展開！！！！」

しかしその魔獣が口を開けて俺を喰らおうとした瞬間に俺の背中から真っ白い三対の翼を出現させて、噛みつこうとした魔獣の頭を細切れにしていく。

「そういえば生命力のストックが無くなってたな！
てめぇらの生命力を戴くぜ！！『生命の木（セフィロト）“峻厳（ゲブラー）”！！！！』」

すると魔獣が一番密集していたところに巨大な光る木が発生したと

思ったらその木の枝が魔獣に伸びていき、次々と串刺しにし刺された魔獣は生命力を奪われミイラになり、終いには砂になり消えていった。

「魔獣も少なくなってきたしアリカもそろそろ落ちてくんだろ。
ラストだ！『日輪“天墜”』！！
そんでオマケだ！『原子崩し（メルトダウナー）』！！！」

すると天空から凄まじい光が照射され、その先にいた魔獣は炭になっていく。
さらに俺を中心に四方八方に照射された光は魔獣に当たると、その部分から蒸発させていく。

そして俺の（『透視能力（クレアボイアンス）』で）見える範囲にはもう僅かしか魔獣は残っていないので、各個を『マテリアル・ハイ』で動けないように行動を封印していく。

因みにこの間五分足らず。
やっぱり一人で軍を相手に出来る能力を複数も使えばかなり早く終わるか。

そしてようやくアリカが穴に落ちてきた。
そして落下中にナギがアリカをキャッチして着地した。

ははは。ナギの奴め、驚いてるな。
アリカは別のベクトルで驚いてるな。

「おい、ナーヴァ……これ、まさかお前がやったのか？」

「おうよ！ちょっとやりすぎちゃった。てへっ」

「てへっ、じゃねぇーーー！！！おま！ここは魔法も気も使えないんだぞ！？」

「ハハハハハハ！俺に言われても出来ちゃったもんはしょうがないじゃん？」

ま、俺のは超能力だからここでも自由自在に使えるんだけどな！
だけど超能力はこの世界には存在しないから説明なんかしません！
だって絶対イタイ子だと思われそうなんだもん！

「それよりナギ、さっさとアリカ様連れてこっから出てろよ。
俺は上でドンパチやってるあいつらに合流してもう一暴れしてくっから」

「ちょ！」

そして俺はテレポートで上に上がって行った。
なんかナギが言いかけてた気がしなくもないが気にしない。

そして俺が崖の下から上がってくるとそこはまだ戦い始めたばかりの様であまり被害が出ていなかった。

「フハハハハハ！！諸君私は地獄の底から帰ってきたぞ！！」

いや～衛兵の皆さん盛大に驚いてるな！つーかさっきから明らかにテンションがおかしいんだが。

例えるなら、初めて酒飲んで酔っ払った時や、一日オールして遊んだ次の日の様なテンションだな！

まあそんなことどうでもいいがな！

「よう！久しいな皆の衆！！」

「おま、一体どうやって上がってきた！？」

「魔獣ぶっ殺してから普通にだが？」

「あの谷のそこでは魔法も気も使えないはずなんだが……」

「そこはあれだ。俺だからってことで」

「やっぱりあなたもバグキャラでしたか」

「ヌハハハ！流石はナーヴァだぜ！！」

そんな風に久しぶりに同級生と会った様に会話しつつも皆手を休めることなく敵を無力化していく。
もちろん殺さずに気絶させるだけ。

俺は剃×ライズ×ベクトル操作×ナンバーセブンの能力を使って、残像どころかラカン達でさえ視認が難しい程のスピードで移動しながら、ソニックブームを発生させて切り刻んだり、相手に触って体内電流を弄って気絶させていく。
ちなみに艦隊は初っ端に雷を落としてエンジン停止させて墜とした。

そしてしばらくして俺達は全員を無力化させた。

そしておれがライズのセンスで強化した視力でナギ達を探すと、原作通りストロベリー空間を作り出していちゃついてやがった。

「おーおー、お熱いこって」

「どうしたんだ？」

「詠春か。いや、俺等は戦い終わったってのにまだあの二人がいちゃついてんだよ。
早くこっからずらかんなきゃいけないってのに」

「フフフ、いいではありませんか。
それよりもナーヴァ。あなたこの後何か予定はあるんですか？」

「ん？特に決めてないけどここで少し修行したら《旧世界》に行こうと思ってる」

「じゃあしばらく暇なんですね？」

「まあ暇っちゃ暇だな。なんか用事あんのか？」

「ええ、一度テオドラ第三皇女に会いに行った方がよろしいかと」

……やべー、今までの熱が一気に冷めてったぞ。
つーか会いに行ったら確実にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩルートだろ。
誰がそんな危ないルート選択するかっての。ほとぼりが冷めるまで会わない方がいいな。

「あ！そうだ！用事思い出した！
てなわけで皆さん、アデュー！！」

そう言ってこの場から逃げ出そうとしたが《紅き翼》の面々に取り押さえられた。なんでさ……

「はーなーせー！本当に用事を思い出したんだー！」

「ほう。それはなんだ？」

「そんなもん決まってんじゃねえか。
俺とアリカ様に罪着せやがったメガロの元老院の暗☆殺（はーと」

「おま！暗☆殺（はーととか言うなよ！
またここに逆戻りだぞ！？」

「詠春。俺の得意分野は対人戦でも対軍戦でも対魔獣戦でもない。
一番得意なのは暗殺だ。現に《完全なる世界》の奴らにも顔がわれなかっただろ？
それに俺の恨みはマントルに到達するほど深いんだ。
だって俺六歳からの二年間を牢屋で過ごしたんだぞ！？
普通に生活してればまだ遊んでる年頃なんだぞ！？
この恨み晴らさでおくべきか！」

「え？お前って見た目通りの年だったの？」

「ジャーック！俺は何回も言った筈だぞ！？それでも三年以上前の記憶はないがな！
だって体成長してるし見た目通りの筈だろ！？
違ったら泣くぞこのヤロウ！」

「その用事は聞かなかった事にしますから、その前にテオドラ様に会ってあげてください。
あの方から頻繁に連絡が来るんですから。
それに今回もアリカ様と一緒に救出してこいと言われたんですよ」

あのじゃじゃ馬め、可愛いところあるじゃないか。（まあ将来はえらい美人さんになるんだが）
つっても救出要請しなくても勝手に助かってたんだがな！

「むぅ。皆がそこまで言うならしょうがないかな。分かった会いに行ってくるよ」

「ええ。逝ってらっしゃい、ナーヴァ」

「ちょ！？アルさーん！？今『いく』の字がおかしかってですよ！？」

「フフフ。そんな事はありませんよ」

「このヤロー！悪趣味な笑い方してんじゃねぇよ！」

「お前らいい加減にしろ。そろそろ行かないとこいつら目を覚ますぞ」

そして俺達はガトウに言われてその場から退散していった。
ちゃんとナギ達はいるよ？

つうか俺らがいるところでもいちゃついてんじゃねえよ。
あんまりにも憎たらしすぎて『心理定規（メジャーハート）』使ってアリカとナギの心の距離とアリカと俺の心の距離を交換しようと思った俺は悪くないはず。
いや正しいはず！
あ、すいませんちょっと調子に乗りました。

そしてなんやかんやありながらも、無事アリカを救出出来てちゃんと原作通りのハッピーエンドを迎えられました。

そん時にクルトに一緒に元老院の不正を暴こうと言われたが丁重にお断りした。
そこはお前一人でやって、原作通りすれてろってんだ。
つうか年上だからって命令すんなよ。精神年齢ならお前よりも上なんだから。

そして色々あったが、俺はテオドラに会うために皆と別れた。
凄まじくいやな予感がするのは気のせいだと信じたい……

第八話：別れ……そして復讐（前書き）

いや～ついに明日からセンター試験
受験本番です

これからはどれくらい間隔が開くかわかりませんが待っててもらえたら幸いです

では皆さん……逝ってきます！！（↑誤字ではありません。あしからず

第八話：別れ……そして復讐

俺は今へラス帝国の王宮近くまで来ている。
しかし、困ったことに俺は世間では犯罪者として死んだとされているため、普通に行動が出来ない。
しかもここにはテオドラに会うために来たのだがよくよく考えたら、名目上はあいつの護衛になったんだが一度も王宮に入った事が無いため王宮内部の人間に知り合いがいないから俺は発見されたら不審人物としてしょっ引かれるだけだろう。
本当に困った。

プライバシーなんか無視して『透視能力（クレアボイアンス）』を使ってテオドラのいるところを見つけてそこに『空間移動（テレポート）』してもいいんだが、なんかやった後が怖そうなのでしたくない。
だけど本当に他に選択肢が思い浮かばない……どうしよう。

しばらく考えたがやっぱり他に案が思い浮かばず、このまま行くことにした。
よく考えたらあいつから会いたがってたし、俺はこんな風にしか会えないのにそのやり方で怒られたら理不尽すぎる。

そしてまずテオドラの部屋を透視するとちょうどテオドラのいる部屋には他に人がいなかった。
そして俺はすぐに『テレポート』した。ちなみに『ダミーチェック』を発動させておく。
え？なんでかって？脅かすためですよ。

そして俺が『テレポート』して最初にみたものは……！！

はい普通に元気の無さそうな顔でした。

え？紛らわしいって？何想像したの？

ん？なんか変な電波を受信した気がするんだが……まあ気のせいだろう。

つうかなんでこんなに落ち込んでんの？明らかにお通夜みたいな感じなんだが。

まあ考えても仕方ないな。

そうだ。ちょっと遊んでやるか？

能力で声弄ってっと。うん。多分大丈夫だな。

「テオドラ様。面会したいというものがきているのですが」

「今は誰にも会いとうない！帰らせろ！」

あれ？予想以上の凹みっぷりなんだが。

これは流石に遊ぶのは可哀相だな。

声を元に戻してっと。

「なんだよテオ、俺が来たってのに随分冷たいじゃないか」

俺がそう言うとテオは信じられない物を見たような目で見てくる。

「ナーヴァ……なのか？」

「そうだよ。正真正銘、本人だよ」

その瞬間テオが飛びついてきた。

「本当に本物なんじゃな？幽霊じゃないよな？」

「本物だし、ちゃんと生きてるよ」

そう言いながら頭を撫でてやる。
するとテオドラは突然泣き出してしまった。

「連合の連中があの映像を全世界に流した時、頭が真っ白になった……
お主が本当に死んでしまったかと思って……
すまなかった……妾達のせいであんな目にあわせてしまって……
戦争をあんなに早く終わらせる事が出来たのも……犠牲者を少なく出来たのも……全部お主のおかげじゃったのに……
オスティアの時だってそうじゃ……お主が頑張ってくれたおかげで死者がでなかったとアリカから聞いておる……それなのに汚名を着

せられて……本当にすまぬ……」

やべぇ、テオがいい子過ぎる。お持ち帰りしてぇ。
あ、言ってくけど俺ロリコンじゃないよ？ホントだよ？

「大丈夫だよ。俺のことちゃんと分かってくれてる仲間がいるから。俺が世界最悪の犯罪者と言われようとも俺を理解してくれる人がいればそれで十分だから」

「でも……お主はこれから表に出て来れぬのだろ？」

「まあそうだろうけど《旧世界》に行けばそんな連中の目もないから大丈夫だよ」

「じゃあお主とはもう会えぬのか？」

ふむ。そういえば原作に色々介入するつもりだからこっちには十八年後には来ることになるんだよな。
そん時に会いに来よう。

「大丈夫。世界に知られてる俺の顔はこの子供の顔だから成長したら分からないだろうしその時にまた会いに来るよ」

「本当か？」

「ああ。約束するよ」

「じゃあ、約束の証として……その……パ……オーを」

顔を真っ赤にしてもじもじしながらお願いって、ロリコンだったら確実に落ちてたな。
つーか今なんて言った？

「テオよく聞こえなかったからもう一回言って？」

「妾と《仮契約（パクティオー）》して欲しいのじゃ！」

「駄目だ」

「な、何でじゃ？」

止めてくれ！そんな絶望したような顔でこっちを見ないでくれ！
罪悪感がハンパないじゃないか！！

「そんなに落ち込むな。今はまだこの世界の人々の心の中には犯罪者としての俺が残っている。
そんな時にもし《仮契約》したことが他の奴にばれてみろ。俺が死んでないってことがばれる上にお前も同罪として処刑されるかもしれない。
それに俺が死んでないってことはアリカだって死んでないってことがばれる訳だ。
俺は誰にも迷惑をかけたくないんだ。分かってくれ」

「でも……」

「大丈夫。絶対に生きて帰ってくるさ。今回だって生還してきただろ？
俺を殺せる奴なんてこの世にゃいねぇさ」

「……わかった。妾はお主を信じて待つ！絶対に生きて帰ってくるのじゃぞ！」

「ああ。俺が帰ってくるまで元気にしてろよ？
俺が帰ってきたのにテオがいないなんてシャレになんねぇからな」

「分かっておる！……元気でな」

「ああ」

そして俺は『テレポート』で帝国を出てすぐさま方舟に入った。

さて、元老院の不正は調べんのも面倒くせぇから直に頭ん中覗くかな。
あと『メジャーハート』使って中から崩壊させっか。
つうか俺っていつテオにフラグ建てたっけ？……まあいいか。

そして俺は色々考えた後にメガロメセンブリアに転移し、元老院の連中の頭の中を覗きまくった。

《完全なる世界》よりも横の繋がりがあるし、別に隠れている訳でもなかったからだろう、案外簡単に悪事を調べ終わった。しかも三日で。

つっても内容は反吐が出るような物ばかりだったが国民にばらせそうにない。

なぜなら報道する機関全てに元老院の息がかかっていたりするもんだからマスコミに流すわけにもいかなくなってしまった。

こりゃ俺が直々に手を下す必要がありそうだな。

そしてさらに三日後、ちょうど会議が開かれた。

もちろん俺はこのチャンスを逃すはずもなくそこに突撃していった。

まずは会議場の外にいる連中を体内電流を弄って昏倒させ、外に続く通路の奴に『心理掌握(メンタルアウト)』で洗脳させて誰も中に入れないようにさせる。

そして今ここに処刑の準備が整った。

俺は会議場の扉を蹴り破る。

その轟音によって会議場にいた奴ら全員が振り返る。

「ようゴミ共。不吉を届けに来たぜ」

連中が口々になにか言っているが同時に喋っているため何を言っているのか聞き取れない。
まあ聞く気はさらさら無いが。

「五月蠅ぇぞ。てめえらに出来ることはもう何もねえんだ。大人しく死ね。
『生命の木（セフィロト）“峻厳（ゲブラー）”』」

そして会議場の中心に光る木が発生したかと思えば中にいた元老院の連中を枝が串刺しにし、生命力を吸い取りミイラにしていく。

光る木が消えたあと、その場に残っていたのはミイラだけとなった。

「さて、残ったあなた達にはこれを渡しておく。これを有効活用してくれることを願っているよ」

そうこの言葉でわかる通り俺は全員を殺したわけではない。
元老院の奴らの頭の中を覗くと奴らに従いながらも不正を暴こうとしていた者や、そもそもそんな裏があるなんて知らないような奴もいた。
そんな奴らは『ムーブポイント』を使って部屋の外に非難させておいたのだ。

俺はそれだけ言うと転移していった。

しかし俺はこの後後悔することになる。

あの会議場にいた連中の中には影武者に摩り替わっていたものが何人もいたことに気づかなかったのだから。

しかもそいつらに生き残らせたものが傀儡にさせられてしまったのだから……

第八話：別れ……そして復讐（後書き）

本当は元老院は全員抹殺してもいいんですが作者にそこまで文才がないため、彼らには生き残ってもらい原作通りにいってもらいます

あとパクティオーですがぶっちゃけ思いつかなかったってのもあります

まあこの段階では出すつもりはなかったんですが考えても思い浮かばないｏｒｚ

最後にこんな自己満足な駄文を評価して下さった皆様、ありがとうございます

第九話：実験、修行。そして……（前書き）

最近のマガジンの展開を考え、京都編を全部削除しました

ココネが帝国の人間だからラカンも行けんだろって思ってましたが、違うみたいですからね

ここを削るとアスナと初対面になるから迷ったんですがこのように決定しました

第九話：実験、修行。そして……

俺はあの翌日に早速修行のために《旧世界》に行くことに決めた。
こっちだと《完全なる世界》の残党とか見つけられると面倒な奴らがいっぱいいるからだ。

しかし困ったことがある。
俺は《旧世界》に行くためにはゲートを使わなければならないんだが、人に見られると面倒なんで使いたくない。
まぁ能力を使えばいいんだがそれもいちいち面倒だし、これからのことも考えて『方舟』で移動しようとしたときに、気付いてしまった。

俺って《旧世界》に行ったことないから『方舟』のゲートねぇじゃん……ｏｒｚ

まぁあの後、結局一回は《旧世界》に行かなけりゃいけなくなったので、能力使って潜り込んでゲートをくぐることに成功した。
ついでに言うとゲートはイギリスのとこじゃなくてヨーロッパのどっかだった。（頭がよろしくないので現地の文字とかが読めなかったのが原因）

その後、俺は日本近海の無人島の一つにゲートを設置して《魔法世

界》に転移できるか試した。

まぁ結果から言うと……

流石方舟！！マジパネェ！！！

《魔法世界》は火星の異相空間だっていうのにアッサリ成功してのけるその技術、そこに痺れる憧れるぅぅ！！

みたいな感じでテンションが上がりまくってた。

そしてその後、さっそく修行を開始したのだがＰＳＩの練習をしていたらいつもの出力が出ていなかったのが気になり、ノヴァを発動させようとしたが、発動しなかった。

そして、心配になり超能力も試してみたところ、こっちは普通に使えた。

このことから察するに、ＰＳＩを使える環境は《ＰＳＹＲＥＮの未来世界》＝《魔法世界》であり、《ＰＳＹＲＥＮの現代》＝《旧世界》だと思い、急いで《魔法世界》に向かった。

もしこれが違って、俺の力が弱くなってるんだったらマジでシャレにならん。

そして《魔法世界》の人気にないところに転移し、早速能力の検証してみたところ、超能力（両方共超能力だが区別のため、禁書の方を超能力、ＰＳＹＲＥＮの方をＰＳＩと表記）の方はいつも通り。そしてＰＳＩはここに来る寸前、《旧世界》で使った時よりも出力が上がっていた。ノヴァも問題なく使えた。

このことから察するに、俺の仮説は正しかったようだ。
まぁ、ノヴァが発動しなかったのは補正だと考え無理やり納得した。

まぁこの結果から、使い過ぎによる能力の低下ではないことがわかり、ホッとした。
もしそうだったのなら能力の使用は控えなければならなかったからな。

しかしそうするとＰＳＩの修行が《旧世界》では出来ないので、時間の誤差のない（歳は取りたくないし、場所だけが欲しかったから）『ダイオラマ球』を買い、中を《魔法世界》と同じ環境にしてＰＳＩの修行もできる環境にして無人島に帰った。

そして、そこで修行を開始した。

まぁ原作開始まで十数年は暇はしないだろう。

～四年と少し経過～

ヤバい。本当にヤバい。
どうしよう。

あ、皆さんお久しぶりです。ナーヴァです。

今自分は十三歳になったんですが困ったことになったんです。
それはなんと……

新しい武術も考えられる限り創り出したし、超能力と武術の融合も
完成させてしまったんです！！！

本当は武術を極めるのに最低でもこれくらいかかるだろうと思っていたんですが、神様はどうやら極める余地もないほど素晴らしい物、いや既に極地に到った物を俺に与えてくれていたため、予定が狂ってやることがなくなってしまった。

クソッ。ぶっちゃけ極めるまでの過程をも楽しみにしていたのに。だって強くなることを実感するって楽しいじゃん？俺だって男なんだからさ。

今は大体原作の十三年前ってところかな？
これ以降特にすることもないし、かといって人目に付くところに行くのもダルイし……
さてどうしたもんか。
？いや待てよ？今俺って十三歳なんだよな。世間一般では中学生一～二年生なんだよな。

よし！決めた！！『ネメシスＱ』使って未来に行こう！！
あと十何年も何して暮らすかなんて思いつかないからな。
それに同じ麻帆良の学生なら介入できる場所がいっぱいあるだろ。
よし！そうしよう！！

でも決めたのはいいんだけどここじゃＰＳＩを使う環境には適してないから（ダイオラマ球の中じゃ『ネメシス』は発動できそうになかったから）《魔法世界》に行ってから使ったほうがいいな。
失敗して時空の狭間なんかに行ったり、変な時代に飛んだらたまったもんじゃねえからな。

そしてそう決めた後の俺の行動は早かった。

すぐに《魔法世界》に転移した後、『ネメシスQ』のプログラムの作成に取り掛かった。
なにせ原作は十年前から人を呼ぶ感じだったが、今回は俺自身が未来へ行くからプログラムを変更させなければならない。

そして俺はそれを約三時間で完成させた。
予想してた時間よりも結構時間が掛かってしまったが失敗をしないように万全を期したためしかたない。
つうか今は時間があり余っているのでそんなことはどうでもいい。

そして俺は『ネメシスQ』を召喚した。

ヤッベ〜。すっごい緊張してきた。
これはあれだな。方舟で《魔法世界》へ行く時の緊張に比べたら段違いだな。

「そんじゃ『ネメシス』、今から十三年後に飛ばしてくれ」

（ちなみにこの『ネメシス』は電話を媒介にして時間転移するんじゃなく、俺の意思で転移するようにプログラムを弄った）

そして俺は『ネメシスQ』の創り出した空間の狭間に入り、その中の流れに乗って流されていった。

時間にして約一、二分だっただろうが、俺自身にとってあの空間での時間は何時間にも感じるほど不快だった。
それでも一応時間転移には成功していたようだった。

まぁ細かいことなんか調べる気になれないんだが。
それにこの俺が失敗なんかする訳がないからな！！（↑自意識過剰

そして俺は時間転移が無事成功（？）に終わって上がりきったテンションのまま、方舟を用いて麻帆良学園近くに転移した。（修行前にゲートは作っておいた）

第十話：やってきました、麻帆良学園！

どうも皆さん。ついにやってきましたよ、麻帆良学園へ。

そいで着いたはいいんですけど今って夜なんですよね。

はぁ、せめて時間だけは確認してくればよかったかな。

そんな風に考えながら森の中を学園長とタカミチがいるであろう（ワザとそうなるように結界を通ってきた）麻帆良学園女子中等部の校舎（があると思われる方向）へ向かって歩いていると、森の中から銃声が聞こえてきた。

しかしどうやら俺に向かって放たれた物ではないようだ。

するとあの銃声は原作通り夜の麻帆良学園を警備する正義の魔法先生（笑）、もしくは《立派な魔法使い（マギステル・マギ）》を目指す魔法生徒（笑）か、極一部のまともな魔法先生または生徒の物だろう。

まぁ様子見も兼ねて見に行ってやりますかな。

前二つだったら容赦なく見捨てて帰るが。

あんな奴らなんか助けたって、百害あって一理なしに決まってるかんな。

そんでその銃声が聞こえる方に向かって『テレポート』で移動してみると、なんか限界っぽい女子生徒（？）一人と二十匹ぐらいはいる鬼（でいいのかな？）がいた。

つうかあれってマナじゃね？
いきなり（未来？の）３－Ａ（人外魔境）の住人に遭遇ですか。
つうかよくペアを組むっていう刹那はどうしたんよ？
いや、それよりもあいつ弾切れか？
反撃しねえし。
原作じゃ生きてっけど流石にこれは見過ごせねえよ。
初めての（麻帆良での）介入はここか。
まぁ別にいいんだけどね。

さて、ちゃっちゃと殲滅させますかな。

「お困りのようだね。手伝ってあげるよ」

そう言って俺は『断罪者（ジャッジメント）』をマナに襲いかかろうとしていた鬼の一匹の頭にブッ放した。

ｓｉｄｅ　龍宮

私は今軽く三十は越える鬼の軍勢と一人で戦っていた。

それというのも私は今日、最初はいつもコンビを組む刹那と共に鬼達と戦っていたのだが、侵入者が出たため確かめに行って欲しいと近くにいた私達の所に依頼が来たのだ。

今日の鬼たちはなかなかの数だったがもう殆ど還したのでこの場を刹那に任せ、私は一人で侵入者を探しに行ったのだが、そこで隠密性の優れた鬼の大群と遭遇してしまったのだ。

私は刹那に救援を頼むが向こうも同じ様にことになっているらしい。どうやらこいつらは私達が別れるか油断するのを待っていたようだ。

流石にこれは私達の手に負えないため、学園の魔法先生達に救援を要請するが時間がかかるため、少し持ちこたえて欲しいと言われたが、正直残りの弾数から耐えきれる自信がなかったのだ。

そして暫く粘って何体か鬼を還したがついに弾が底をつき、目の前に鬼が迫っていた。

どうやら私はここまでのようだ。

そして私が覚悟を決めると、

「お困りのようだね。手伝ってあげるよ」

と、どこからか声が聞こえてきた。

そして次の瞬間には目の前にいた鬼の頭が破裂して鬼は消滅した。
どうやら私は助かったようだ。

ｓｉｄｅ　ナーヴァ

ヤベ。
思わずヘッドショットかましちまった。
つうかあの鬼還んなかったぞ？なんか見た感じ消滅したっぽかったし。
……なんでだ？

……あ、そっか。
この世界にはＡＫＵＭＡが存在しないからその代わりにイノセンスはこの世界の鬼達に対して絶対優位の位置にあるのか。
あいつもただ喚ばれただけだったんだろう。
知らなかったとはいえ、あの鬼には申し訳ない事をしたな。
そして俺は『ジャッジメント』を仕舞った。
俺が思考の海に潜っているとマナが声をかけてきた。

「すまない。救援は感謝する。
しかし君はいったい誰だい？この学園の関係者としては君みたいなこに会ったことは無いんだが」

う～ん。今のセリフの中の“こ”は何を表していたんだ？
まさか娘じゃないよな？もしそうなら今から君を調ｋ
ゲフンゲフン！
君とＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしなければならないんだが。
まあ今はそんな事は置いといてやろう。

「俺はタカミチの古い知り合いでね。
今日は外からやってきたんだが、時間を間違ってしまって着いたのが今さっきなんだよ。
そんで森の中を歩いてたらあれに襲われてる君を見つけたってわけさ。
いやいや、間に合ってよかったよ」

そして俺がマナと話していると律儀にも待っていてくれたリーダー格の鬼が話しかけてきた。

「なんや嬢ちゃん。あんたもその娘の仲間なんかいな。
それじゃ悪いけどあんたも倒させてもらうで」

ピキッ！待て、今あのクソ鬼なんて言った？変な言葉が聞こえた気

がしたんだが……

「おいそこの鬼。今なんつった」

「倒させてもらうで」

「その前」

「その娘の仲間なんかいな」

「その前」

「嬢ちゃん」

「それは誰に向かって？」

「決まっとるやろ。あんたや」

ほ～う。そうかそうか。どうやら聞き間違えではなかったようだな。

そして俺は服の中から『ハーディス』（某黒猫愛用の装飾銃。オリハルコン製）を取り出した。

そして俺はその銃に帯電させていく。

「おい、クソ鬼。冥土の土産に一つ教えてやるよ」

そして俺の体に帯電する電気がどんどん大きくなってくる。

「ん？なんや」

「俺は男じゃーーー！！！
吹っ飛べ！！『電磁銃（レールガン）』！！！！」

そして俺は『トリックルーム』を使って弾を装填しながら『レールガン』を二十四連早撃ち（クイックドロウ）でぶっ放してその場の鬼を殲滅させた。

「はぁ、そういえば修行中はメンドイから髪切んなかったんだよな。
そりゃ間違えられてもしょうがない、しょうがないのか？」

そして俺が自問自答しているとマナが声をかけてきた。

「ありがとう、助かったよ。ついでに一つ頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

「ん？何？」

「私の仲間も苦戦しているようなので手伝ってほしいんだが……」

「ん～、大丈夫じゃね？
なんか人の気配が増えて鬼の気配が減ったから増援が来たんじゃね？
連絡してみれば？」

「そうか。
刹那か？そっちはどうだ？
……そうか救援が間に合ったか。私の方も大丈夫だ。侵入者は不審人物じゃなかったしその人のおかげで助かったよ。
……わかった。今日は解散なんだな。
じゃあ私はこの人を連れて学園長室に行くから。ああ、先に帰ってくれ。
ではな」

うん、予想通り救援が来てたか。つうか教師陣は来んのが遅えな。
お前らが最前線で戦えよ。
いくら実力があったって学生を最前線に出すなって。死んだらどうするつもりなんだか。

「あ。そういえば君、タカミチに連絡できる？」

「ああ大丈夫だが」

「じゃああいつに連絡してくれ」

「わかった」

そしてマナはケータイを取り出している。
仕事仲間の刹那には念話だったのかな？

「あ、高畑先生ですか？
今日の侵入者というのがあなたの知り合いと言っていたんですが。
……え？心当たりがない？
いえ、でも一応助けてはくれましたからそこまでの危険人物ではないと思われるのですが……」

あんのヤロウ疑ってやがんな。
つうかマナがちょっと警戒を始めちゃったじゃないか。
まったくめんどくせぇな。

「ごめん、埒があかなそうだからちょっと替わってくんね？」

「……はい、替わります」

「どうもありがとうね。
さて、久しぶりだなタカミチよ」

「僕の生徒を助けてくれたようだね。感謝するよ。
でも君は誰だい？僕には訪ねてくるような知り合いはいないんだが」

「そうか、お前の交友関係はそこまで可哀想なことになってたんだな。
それを知ったらガトウはどんな顔するやら……」

まあ警戒してそう言ったんだろうが生憎と言葉通りに取らせてもらったよ。
つうか実際こいつの交友関係ってどうなってんだ？

「っ！君はいったい誰なんだい！？僕と師匠の関係を知っているなんて」

「なんだ。お前は昔、一緒に行動していたやつの声がわからないのか？
まったく、悲しいな」

「まさか君は！」

「ようやくわかったみたいだな。じゃあここの最高責任者の部屋で責任者と一緒に待っててくれ。
あ、ちなみに二人以外だれもいれんなよ？
もし誰かいたら『二重の極み』かますからな。覚悟しとけよ？」

「！？わ、わかった！じゃあ場所はわからないだろうから、龍宮君に案内してもらってくれ」

「りょーかい。じゃすぐに行くから。もし俺より遅くても『二重の極み』だからな？
ちなみに強化はするから。
じゃあね」

そして俺は返事を待たずに電話を切った。

「はい、ケータイありがとね」

「ああ」

「それとこれからここの最高責任者の部屋に行くんだけど場所がわかんないから案内してもらってもいい？」

「わかった。では行こうか」

「いや、わざわざ歩くのもメンドイでしょ？ちょっと待ってて」

そう言って俺は上空に『テレポート』して、さらに『マテリアル・ハイ』で足場を作り、そこに着地した。

「ここからなら見晴らしもいいでしょ。
で、その建物ってどっちの方角？」

「いや、その前にこれはいったいどうなっているんだ？」

そっか。今マナには何も無いところに立っているように見えてんのかな？
いやこいつは魔眼を持ってっから見えてないことはないか。
これがなんなのからかんないのか。まあ教えないけどね。

「残念ながらそれは企業秘密ってことで教えられないな」

「ふむ、じゃあしょうがないね。
ああそうだ。学園長室があるのはあの建物だよ」

こいつ、自分が魔眼持ちで目が常人よりもかなりいいっていうこと忘れてね？
まぁ俺はライズで強化した視力でわかるんだけどね。
そして俺は再び『テレポート』して建物の前に辿り着いた。

「ここでいいの？」

「ああ、大丈夫だ。というかよくここを指してるってわかったな。常人の視力では見えないと思ったんだが」

このヤロウわざとか。まったくメンドイな。
まいっか、気にしてたってしょうがねえし。

「まあね。俺は常人よりも数倍視力がいいからな。
それより中まで案内してくれないかな？
建物の中は流石にわかんないからさ」

「わかっているさ」

そういって俺を中に案内いてくれた。
そして学園長室の扉の前に到着した。

「ここだよ」

「ありがとね。
あ、あと言い忘れてたんだけど、今日俺がここに来たことは誰にも言っちゃだめだよ？」

「そうなのかい？」

「うん。あと今度会った時は初対面のフリしてね」

「わかった。命の恩人の頼みだ。きちんと約束は守るよ」

「ありがとね。じゃ元気でね～」

「君もな」

そうしてマナは帰っていった。
さて、この中にいるのはタカミチとうわさに名高きぬらりひょん、もとい学園長か。まったく面倒なことにならなきゃいいが。
そして俺が扉をノックすると中から返事が返ってきたので遠慮なく中にはいっていった。

そして目に入ったのは豪華な机に座るぬらりひょんとその傍に座る佇むタカミチだった。

うん、やっぱり頭長ぇな。からかってやるか。

「おいおい、タカミチ。
俺はこの学園の最高責任者を呼んどいて欲しいって言ったんだけど、
なんで妖怪がいんの？
お前もしかして俺なめてんの？ねえ、そうなの？
もしそうならＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだよ？そこんとこ理解できてんの？」

そう言いながら俺は軽く殺気を飛ばす。
するとタカミチの顔はどんどん青くなっていく。
そしてぬらりひょんは落ち込んでる。

はっはっはっは。たーのしーなー。
あれ？俺っていつからこんなドＳヤロウになってんだ？まあいいか。

「ま、待ってくれナーヴァ！
この人は正真正銘人間だよ！」

「いやいや、こんなに頭の長い人間がいるわけないだろ？
もしかしてお前洗脳されちゃってんの？」

「わしは本物の人間じゃ！！」

う～ん、あんまりいじりすぎて険悪になっても困るな。
からかうのもこの辺で止めとくかな。

「いやいや、うわさには聞いていたんですけどね、実物を見ると信じられなくて。
はじめまして。麻帆良学園学園長ならびに関東魔法協会理事の近衛近右衛門さん。
そんで久しぶりだな、タカミチ。
かれこれ何年ぶりだ？つうかそれにしてもずいぶん老けたなお前。
あ、それとこの人には俺のこと教えてあんのか？」

「そうだね、十六、七年ぶりかな？
あと君の事は僕が知ってるようなことは殆ど教えたよ。君が本当の戦犯じゃないってことも。
それにしても君は歳を取ってるように見えないよ。
君の種族は人間じゃなかったのかい？」

「はっはっは。もうそんなに経ってたのか。
俺が若い理由はあれだ。
新しい能力使ったら時間旅行しちゃった。
だから俺の体感時間的にはまだあれから四、五年しか経ってねえんだよ」

どうやら俺の時間旅行は成功したようだな。
よかった、よかった。
それにちゃんと教えてあるのか。まあこいつには一応知っといてもらわないと困ることもあるかもしれないからな。

「時間旅行！？

それはすごいな！」

「ん？なんだ疑わないのか？」

「いや、もう君のことは僕の常識で測れると思ってないよ」

「なんか軽くバカにされたような気がするんだが。まあ置いておこう。

それよりも電話で僕の生徒って言ってたけど、お前教師なんかやってんだ。

どこ担当してんの？高校？中学？まさか小学校や大学なんてことはないよな」

まあ知ってるけど知らないフリしなきゃね。

でも知らないフリってのもメンドくさいな。

「僕は今は中学校の教員だよ。ついでに言うと今年度からは二年生の担任だよ」

「ん？今年度？そういえば今って何月？」

「今は四月の頭だよ。ちょうど明日から始業式だ」

お、転入するにはいい時期じゃん。

マジタイミング完璧だな。

「それよりもどうしたんだい？君から訪ねてくるなんて」
「なんだ、俺は誰にも会いに行っちゃいけないのか？」
「いや、そういうつもりで言ったんじゃないよ」
「分かってるよ。俺も冗談で言っただけだ。
それで本題なんだが、俺この時代に戸籍とかその他もろもろが無いから色々用意して欲しいんだ。
名前はもちろん変えるつもりだから。
あとついでに学校にも行きたい。
ここって学園都市なんだから学校なんかいっぱいあんだろ？
ちなみに俺は今十三歳だから、今年度からは中二でよろしく」
「珍しいね君から頼みごとなんて」
「うるせえ。これはお前に頼んでるわけじゃねえよ。
その学園長に頼みたいんだよ。
だってお前って表の社会では権力持ってねえだろ」
はっはっは。ちょっと毒吐いただけでタカミチのヤロウ落ち込みやがった。
そんで学園長はなんか考えこんでんな。大方、この代償になにか取引しようと考えてんだろうな。
まぁお前の思惑に乗ってやるつもりなんかないんだがな。
「あいわかった。戸籍やらは準備しよう。
その前に名前なんじゃが……」

名前……そういえば決めてなかったな。
どうしよう……

「決めた。名前は哀川（あいかわ）　葵（あおい）で」

「由来とかあるのかい？」

「いや、なんとなく出席番号一番になるように考えただけだけど？」

ようはなんも考えてないってことだ。
タカミチもあきれてやがる。

「そんで今後のことなんだけど、俺は極力普通の学園生活を送りたいんで夜の学園の警備とかやりたくないんです。
つうか俺は朝が弱いから夜にそんなことしようもんなら学校に行くのが三時間目以降になるのは確実なんで勘弁して下さい。
それでも絶対にやれって言うなら警備担当する全員に俺の本名をばらしますから」

まあそんなこと言っても殆ど嘘なんだけどな！

「う～ん、ここまでするんじゃから手伝って欲しいんじゃが……」

「いやですよ。それにこの世界には俺以上に恩知らずがいっぱいいるんですよ？
命助けたり、戦争を早く終わらせるように尽力したっていうのに、俺を戦犯に祭り上げて殺すようなね。
それに比べたら俺なんか可愛いもんじゃないですか」

ここは連合と繋がりがあるからこれを言われたらなにも言えんだろ。
爺のやつめ、唸ってやがる。
残念だなお前の思惑通りにことが進まなくて。
そんでタカミチ、お前は苦笑してんじゃねぇっつの。

「あ、それと俺の本名とかは誰にも言わないでくださいね？
ただでさえばれると面倒なんですから」

それにここには自称正義の魔法使い（笑）がいっぱいいるしね。
まぁ突っかかってきた瞬間にぶっ殺してやるがな。

「わかった。じゃあ次に行きたい学校と住むところなんじゃが……」

「学校は適当に決めてもらっていいですよ。
住むところはその学校の寮がいいですね。
相部屋にするなら関係者じゃない人がいいです。
ばれることの心配はしなくても大丈夫ですよ。俺の場合は素手で普通の魔法使いを圧倒するレベルなんで使うつもりはありませんから。
というかタカミチ達と別れたあとはずっと修行してたんで、そこか

らいったいどこまで強くなってんのかよくわかってないですけどね」

うん。意外と希望が多くなったな。
まあ別にいいだろ。

「わかった。明日までに用意しておこう」

「ホントですか！？
ありがとうございます！
あ、これお礼ですんで」

そう言って俺は金の延べ棒を取り出す。（《完全なる世界》の下っ端を潰してる時にかっぱらったやつ）

いやいやまさかそんなに早く動いてくれるとは。

「こ、これは流石にちと多いかのう……」

「いやいや、それは今回の迷惑料と依頼料と中学の学費ってことで」

なんかこれって汚職みたいでいやだな。

「つうか俺ってそれ以前にこの世界の通貨持ってないんですよね」

「え？じゃあどうやってここに辿り着いたんだい？」

「まずはネットをハッキングして元《紅き翼》の連中の現在地調べて、そっからいつも通りの『テレポート』だけど？」

「そんなに堂々と犯罪しましたと言われたら困るんじゃが……」

「気にしたら負けです。
つうかタカミチ、これ換金してくんね？」

そう言って俺は金の延べ棒やら様々な宝石を取り出す。

「こ、この量はいったい……」

「それはあれだ、お前らと合流する前に一人で《完全なる世界》を潰してた時にかっぱらったものを鼠小僧の伝説のように貧しい人たちや戦地になって困ってた人たちにあげてたものの残りだ」

タカミチ、なんだその表情は。読み取りにくいぞ。
あとぬらりひょんもそんな微妙な顔すんな。

「俺から頼みたいことは以上ですけど、そちらからは何かありますか？」

「今はとくにないの。
あとでなにか頼みたいことがあったら頼んでもいいかの？」

「ものによると思いますけど多分大丈夫ですよ」

おおよそネギが来たら色々と頼まれんだろうな。
まああのクソガキの手伝いなんかしてやるつもりなんか欠片もないんだがな。

「じゃあ今日はもう失礼しますね。
明日からまたよろしくお願いします」

「む？これから何をするんじゃ？」

「これから住むことになる街の地形を把握するために散歩してきます。
今日は泊まる場所も金もありませんから」

「む？なんならホテルでも手配するぞい？」

「いやいや、これ以上を迷惑かけるわけにはいきませんよ」

つうか無駄に貸しなんか作りたくねえんだよ。

「じゃあ明日は始業式ということらしいんで七時ごろにまたここに来ますね」

「うむ。そうしてくれ」

「では失礼します。
じゃあタカミチ、また明日な。そんで明日までには換金しといてくれ。
色々と生活必需品を買わなけりゃいけないし、ケータイも買わなきゃいけないから」

「わかった。明日の放課後までには渡せるようにしておくよ」

そして俺は学園長室を出て、学校の外に出た。

それにしてもこれからはこの学園で生活すんのか。
色々と楽しませてもらおうか麻帆良学園よ。
原作が始まるまで、せいぜい俺を退屈させんじゃねえぞ？

主人公設定（前書き）

次回からは麻帆良編ですが、今回は主人公設定です

主人公設定

名前：ナーヴァ　麻帆良では哀川（あいかわ）　葵（あおい）と名乗る

年齢：十三歳（現在中二）

身長：１８０ｃｍ（生命帰還を使えるので身長を変えることが出来る）

体重：８０ｋｇ

容姿：黒髪黒目

顔はＧｅｔ　Ｂａｃｋｅｒｓの風鳥院花月似

体型は生命帰還を使っているため痩せ型

髪は修行してた時は切るのが面倒だったため伸ばしたままで、そのためよく女と間違われる

もういっそコスプレレベルで真似しようかと考えている

能力：ＰＳＩは基本的に全て使えるが、《旧世界》ではノヴァは使えないし、《魔法世界》よりも威力が低くなる。

超能力は全ての能力が最低でもレベル４クラスまで使える（同時使用も出来る）

武術は殆どを極めた。素手でも剣でも棍でも槍でも銃でも、ありとあらゆるものが達人レベルで扱える。超能力とのハイブリットも完成させた。

魔力はかなり多いのだが、精霊に嫌われているため魔法は使えない。そして嫌われすぎているため、回復魔法が効かない。

呪いの類の耐性はかなり高い。

気はラカンよりも多い。

咸卦法も完璧に使いこなせる。
魔力と気は他の魔法使いに気付かれないように通常時は封印している。
武器はいつもめだかボックスの宗像のように隠し持っていたが、麻帆良では二、三個しか持ち歩かずその日の気分によって持ち歩く武器を変える。持ち歩いていない武器は方舟の中にしまってある。
イノセンスのシンクロ率は全て臨界点。そしてイノセンスを出したいときは念じれば出てくる。（イメージとしてはフェアリーテイルのエルザの魔法のようなもの。ただし魔力は消費しない）
方舟の奏者の資格を持つ。《旧世界》と《魔法世界》の行き来も出来る。

主人公設定（後書き）

こんなもんですかね

あと前回の後書きに書き忘れてたんですが、次回からは本格的に麻帆良編に入るため、主人公以外の視点もいれるようにしていきたいと思います

まあうまく出来るかわかりませんが

それでは皆さん、次回はいつになるかわかりませんが待っててくれたら幸いです

第十一話：転入～！！ゑ？マジで？（前書き）

皆さん、どうもお久しぶりです

今回の地震で心配してくださった皆さん、ご心配おかけしました

テメェの心配なんかしてねぇよって皆さん、自意識過剰で申し訳ないです

実は自分関東でも被害がなかったところに住んでいて、地震は全く問題ありませんでした

遅れたのは偏に作者の責任です

あ、因みに今年はちゃんと大学受かって無事に大学生になりました

まぁ私のことはこの辺で

今回は時間がかかってますが出来はいつも通りだと思います

因みにあとがきにアンケートがあるんで見て貰えるとありがたいです

ではどうぞ（　・∀・）つ

第十一話：転入〜！！ゑ？マジで？

俺は昨日の約束通り、一晩学園の中を散策した後に、予定時間よりちょっと早いが学園長室にやって来た。

「学園長、おはようございます。戸籍やら、転入手続きはどうでしたか？」

「うむ。戸籍の方は高畑君に任せたが、転入手続きの方は終わっておるよ。
ほれ。これがこれから行く学校の制服じゃ」

そういって学園長（ぬらりひょん）は紙袋に入った制服を渡してきた。

「ありがとうございます。それで俺がこれから通う学校名と場所なんですが……」

「うむ。学校名は麻帆良学園本校女子中等部じゃ。クラスは二年Ａ組で校舎はここじゃ」

……ハ？イマコイツナンテイッタ？

「すんません。もっかい言って下さい」

「麻帆良学園本校女子中等部じゃ」

「よしわかったジジィそんなに死にたいなら俺が今すぐ引導を渡してやるからすぐ死ね」

「フォ！？ど、どうしたんじゃイキナリ！？ちょ！そんな殺気をぶつけんでくれ！！」

学園長は俺の殺気に顔を青くしているがそんなことは知ったこっちゃない。（因みにこの殺気は学園長一人に向けられたもので他の者はとくに何も感じない。これは暗殺者をしていた時に身に付いた、いるんだかいらないんだかよくわからないスキル）

「おいジジィ、俺はお前からみたらなんだ？」

「口がちょっと悪い女の子かの？」

ぬらりひょんは冷や汗をだらだら掻きながらそんなことをいいやがった。

「ジジィ、冥土の土産に教えてやろう。俺は男だ」

そして俺がそう言い放った瞬間に顔から血の気が一気に無くなったジジィの額に銃を突きつけ、真っ赤なお花を咲かせようと引き金を引こうとした瞬間、タカミチに羽交い絞めにされ止められた。

「ちょ！どうしたんだい！？なんでいきなり学園長を殺そうとしてるんだい！？」

「おお。なかなかの瞬動じゃないか。いくら俺がプッツンきてたからだとしても気がつかないとはやるじゃないか。
そんで理由か？そんなもんは簡単だ。このクソジジィが俺を女と勘違いして女子校に入れやがったからだ。
こんな外見も中身もふざけた頭いらないだろうから俺が親切にも処理してやろうってだけだ。
わかったら放せ。俺はもうこのふざけた頭は見たくないんだ。
……そういえばタカミチ、お前は戸籍を作りに行ってたらしいな。
俺の性別はちゃんと男になってるよな？
なってなかったらあのジジィの次にお前の頭にも真っ赤なお花を咲かせてやる。
安心しろ、一瞬だからきっと痛みは感じないだろ。いやむしろ痛みは感じてほしいな」

「だ、大丈夫だよ！ちゃんと男で作ってきたから！ほら！」

そして焦ったタカミチが俺に作ってきた書類を見せる。
……うん。たしかに男になってるな。

「残念だったなジジィ。
お前は一人であの世に逝ってこい」

そして俺がタカミチの拘束を力ずくで振り払おうとしたがなかなか振り解けない。どうやらこのヤロウ咸卦法を使ってやがんな。

「す、すまんかった！！
儂が悪かった！！お願いだから落ち着いてくれ！！」

なんか必死になって土下座までしそうな勢いだ。

なんか興ざめだ。
俺は生憎こんな老人を虐めて悦には入るような人間じゃないからな。

それより問題なのは俺のクラスだ。
介入しようとは思っていたけどまさか初っ端からあのクラスにぶち込まれるのは予想してなかったぞ。
まあ同じクラスなら介入は楽なんだろうが、あのクラスには真祖に魔族のラスボスクラスの妹（こいつは何もしないだろう）、未来人、傭兵スナイパー（これは大丈夫か？）、野太刀常備のこのちゃんジャンキー、忍者、戦闘狂（バトルジャンキー）のカンフー娘、あと真祖の従者のロボ子。
こんなに危険人物がいやがる。

そういえばアスナは原作通りに麻帆良に来てんのか？
これは後でタカミチに聞く……いや、めんどくさいからＰＳＩで頭ん中を直接覗くかな。

つうかそんな風に考えるとあそこって本当に人外魔境だよな。
……いや、待てよ？
たしかあそこのクラスって野菜小僧のためのクラスなんだよな。

そこに女だと思っていた俺を入れたって候補者の一人としてか？
……流石にそれは考えすぎか。
でももしそれが本当だったらあのジジィはブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！って感じだな。

マジで鬱になるわ～。
つうか学校変えてくんねぇかな？

「おいジジィ。しょうがないからここはタカミチの顔を立てて、あと初犯ってことでこれからはずっと敬語を使わないってことを条件に許してやる。
以後気をつけろ。
あと学校変えられっか？」

「もう手続きが終わってしまって今日から新年度じゃから無理じゃ」

そーすっとこれからは物語が始まるまであの無駄にテンションの高い奴らと一緒に同じクラスで過ごすことになるのか。

あのクラスって真面目な奴っていたっけ？

……いた！そう言えばいたじゃないか！
あの超リアリストの長谷川千雨（はせがわちさめ）こと、トップネットアイドルのちうちゃんが！！

つうかこの頃って言い方は悪いけど精神的に病んでる状態なのか？
それともも少し小さい頃か？

でも俺も女子校唯一の男子生徒ってことであの面子と一緒に見られんのかな……

それだとちょっといやだな。

つーか俺は住むところは寮を希望したんだがその辺はどうなってんだ？

「そういえば学園長。
俺はどこに住むんだ？」

「それなら君の希望通りに関係者じゃない、一人部屋の子に頼んでおいたわい。
たぶんそろそろ来ると思うぞい」

「それ女子寮で尚且つ相部屋は女子だろ」

「……」

「おい、なぜ目を逸らす。
しっかり目を見て詳しく教えろ」

「すまん、言う通りじゃ」

「そんなとこ住めるわけないだろうがこのバカが！
俺の住む家はお前が用意しろ。
関係者の近くには絶対にするんじゃねぇぞ。

用意出来るまではホテルに泊まる事になるからその金はお前が出せ。いいな」

「そ、それは……」

「お前に拒否権なんか存在しねぇんだよ。あとそれにかかる費用は経費とかで落とすんじゃねぇぞ？これはお前の不始末なんだからお前が自腹切れ。あとホテルは最高級のスイートにしろ。これが今回のお前への罰だ」

「ぐ……流石に今回はワシの勘違いが招いた結果じゃから仕方あるまい。ではお主のことは他の人には共学のためのテストケースということにしておくから何か聞かれたらそう答えてくれ」

はぁ～、これで俺は完全にあの人外魔境の一員になるのか。……いや、それ以前から俺は人外だったか。

まぁそんな事はどうでもいいか。

「よし。今日話す必要のあることはこんなもんだったな。あ、タカミチ。放課後にお前に用事があるからちょっと時間作っとけよ。それと換金をたのんだ金なんだが……」

「それならちゃんとやってきたよ。ほらこれがそのお金さ」

そう言ってタカミチは俺に向かってアタッシュケースを渡してくる。
アタッシュケースだと中身が真っ当なものに思えないのは俺だけだろうか？
ま、どうでもいいや。

そして中身を確認してみると、前世では見たことのないほどの諭吉さんが！！
やっぱり貴金属や宝石よりも諭吉さんのほうが自分がどれだけ金持ちになったか実感するぜ！
つーかこんだけあれば今後二、三十年変なことしなければ普通に裕福な暮らしが出来るぞ。
こんだけあるんだったたらもっと金を配っとけばよかったな。いや、もうそんな暇は既になかったか。

そして俺はそのアタッシュケースを方舟にしまった。

「相変わらず凄いね、その倉庫は。
一体それはどういう原理なんだい？」

「前も言った通り、これは企業秘密だ」

「ハハハ。そう言えばそうだったね」

そう、俺はこの方舟の事は誰にも教えていない。
《紅き翼》の連中はこの倉庫のことは俺の能力だと思ってるだろう

し、移動のことも俺の使う『テレポート』だと勘違いしているだろう。

以前ならまだしも、今は《魔法世界》にも転移出来ることがわかってしまったため、これのことは誰にも教えることはないだろう。

「それよりもお前はそろそろ職員会議に行かなくていいのか？」

「あ、そうだね。じゃあ僕は職員室に行ってくるよ。ホームルームを始める前にここに迎えに来るから」

「りょーかい。
あ、その前にクラス名簿とか見せてくんね？
関係者とは極力関わりたくないからね」

「ああ、そういえばそれも持ってきてたよ。
はい、これだよ」

そういってタカミチは懐からクラス名簿を取り出し、渡してきた。

「サンキュー。
お前はしっかり教師の仕事しろよ。魔法使いだからって教師の仕事を疎かにしたら、教師に喧嘩を売ってるようなもんなんだから、そこんところちゃんと考えろよ」

そしてタカミチは曖昧な返事をして、学園長室を出て行った。

原作を見ていても気に入らなかったんだが、魔法教師の連中は一般の生徒のことをなんだと思ってんだ？
あの反応だとタカミチも魔法関係を優先して教員としての仕事は二の次って感じだな。
俺は小中学生の時は教師はしっかりしてないといけないと思うんだが。

まあ本格的に気にくわなかったら原作無視してこの学園の魔法関係者を全部潰すか。
それで超の未来になったって知ったこっちゃねえし。

あ、でもテオが消えんのは嫌だな。
ま、そうなったら俺が魔法世界が消えないですむように頑張るかな。
まあそんな壮大なことはその分岐点に来たときに考えるとして、今は目の前のことを考えなきゃな。

「さて、学園長。
こん中のこのガキが明らかにあの《闇の福音（ダークエヴァンジェル）》に見えるのは気のせいか？」

「ああ、それなら《ダークエヴァンジェル》で間違いないぞい」

つーことは原作通りナギに登校地獄の呪いをくらったんだな。

「そういえばナギの奴が、『期限が来たら俺かナーヴァが登校地獄

の呪いを解きに来る』ってゆうとったんじゃが……その様子だと聞いてない？」

「ああ……」

いや、流石にそれはねぇよ、あのバカヤロウ。
これで俺の正体がバレたらより面倒くさくなっちまったじゃねぇか。
つーかそれ以前に俺が処刑でくたばってないって情報を無暗に他の奴に教えんじゃねぇっつうの。
いや、まず第一に俺ってあいつの尻拭いをしてやるほど仲良くした覚えも、あいつに借りを作った覚えもないんだが……

「ジジィ、最初に言っておくが俺は魔法は使えん」

「ほ！？」

ちっ、ジジィの驚いた顔なんてきめぇだけなんだよ。
つーかナギめ、俺の力は万能だと勘違いしてやがんのか？
……まあたしかに、あいつらと一緒にいた時は出来ない事なんてなかったけども……

「ジジィ、てめぇに特別に俺の力の事を触りだけ教えてやる。これを知ってんのは《紅き翼》の連中とテオとアリカだけだ。光栄に思え。
そんで俺の力だが、お前等の知ってる魔法でも気でもない、言うなれば第三の力だ。

そんでこれは怪我を治すことは出来ても呪いは解けねぇ。
ついでに言うなら、俺は魔力だけなら結構持ってるがタカミチ同様、いやタカミチ以上に魔法が使えねぇ。
だから俺にあのバカがかけた呪いは解けん。
それにまず第一に俺はそんな事を頼まれてない」

……あれ？
そういえば『神ノ道化（クラウン・クラウン）』を使えば呪いって解けんじゃね？
この世界の魔法って一つ一つ精霊が関係してくっから、人外である精霊をぶった切れば解けんのかな？
まあ失敗する可能性も無きにしも非ずだからこれは言わなくてもいいか。バレたら試すってことで。

「まあ俺の事はどうでもいいから、先にクラスメイトの事を聞こうか。
そういえば、こいつには昨日会ったな。一応次に会ったら初対面のフリをしてくれって頼んだけど、信用できる？」

原作知識から信頼出来るって事は理解してっけど一応聞いておかないとな。

「おお、龍宮君か。
彼女は関係者で、立場的には傭兵じゃから一度約束したことはちゃんと守ってくれるじゃろ」

「ん、それを聞いて安心した。
そんでどれが関係者か教えてくれ」

「分かったわい」

そして俺はクラスの中の関係者を教えてもらった。
教えてもらったのは、春日、茶々丸、桜咲だった。
そして超に関しては要注意の生徒と教えられた。
このジジィは超が未来人だって知らなかったんだっけ？
まあ覚えてないからいいや。

「それよりジジィ。
この近衛木乃香ってのは、お前の血縁でいいのか？」

「おお！それはワシの孫じゃ！
どうじゃ！カワイイじゃろ！？」

「五月蠅ぇよ、ジジィ。
つうかこいつは関係者じゃないのか？」

やっぱり知ってるんだが聞いとかないとな。

「この子は親の方針で魔法のことは知らんのじゃ。
おお、そういえばこの子の親はお主も知っておる青山詠春じゃ。
尤も結婚して名前は近衛詠春になっておるがの」

「ふ～ん。
それにしてもよかったな、お前ら男共に似なくて。
つうかお前と似てたら女として人生終わりだろうがな」

やっぱりここも原作通りか。原作との違いは今の所はエヴァの呪いだけかな。
他のクラスメイトを見ても変わってないし。
ちなみにアスナは『神楽坂明日菜』として原作通りにいた。記憶のほうは知らんけど。

まあ殆ど原作通りに流れていくだろうから、ちょくちょく介入すべきところは介入していくか。
でもこの世界には『俺』がいるからどっかに原作との相違点があるかもしれないんだよな。

まあその相違点が『俺』と同じように転生者じゃないことを祈るかな。

というか、まだこいつに聞きたいことがあったんだった。つーか正面からいってもはぐらかされるだけだからカマかけるだけにするか。

「それにしても、この麻帆良の認識阻害の結界は凄いな。
中にいる人の常識まで外とは乖離してんだからな。
つーかここまでヒドいともはや呪いじゃね？
ここまですんだったら一般人を入れずに魔法使いだけの土地にすりゃよかったのに」

さて、このジジィはどう出る？

ガタッ！！

「「誰だ（じゃ）！？」」

ヤバ！？誰かに聞かれたか！？

「おいジジィ！！
認識阻害とかの結界を張らなかったのか！？」

「そんなはずはない！！
ちゃんと張ったわい！！」

クソッ！
初日で正体バレるとか冗談じゃねぇぞ！！

そして俺は『透視能力（クレアボイアンス）』で壁を透視するとここから背を向けて逃げようとしてるここの女生徒を見つけた。

「逃がさねえよ。
『トリックルーム』
α⇒βアップロード」

そして逃げ出した女生徒を目の前に転移させた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ　？？？

今私は少し時間が早いが学校に向かっている。

それというのも私達のクラスに転入生が来ることが急に決まったらしく、今まで一人部屋だった私のところに白羽の矢が立ったのだ。しかも学園長直々に電話をしてきたから断ろうにも断れなかった。

「クソッ、これじゃ私のネット生活が維持出来ねえじゃねえか。いや、それよりも転校して来る奴がどんな奴かだ。そいつがクラスの奴らみたいな能天気な奴ならネットで個人情報バラまいて社会的に抹殺してやる」

そうして私がそいつについて色々と考えてると学園長室の前に着い

てしまった。

「はぁ、着いちまった」

そして私が学園長室の前でノックしようとすると、学園長の他に男だか女だか判別の付き辛い声が聞こえてきた。

たぶん転校生が学園長と何か話してるんだろう。

会話中に入るのはどうかと思ったので少し扉の前で待っていると会話の内容が聞こえてきた。

しかし聞こえてきたのはあまりにも変な単語ばかりだった。

「（呪いに魔法？いったい何の話だ？あんな爺さんってそんな事が好きなオタクだったのか？）」

あんな爺さんにそんな趣味があったのかは知らなかったが、転校生はそういうことが好きならあのクラスに染まってしまう前に友達になれるかな。

それに学園長の話通りなら、そいつは麻帆良の外から来るらしいから『麻帆良の常識』というものに染まっていない筈だ。

それなら私でも普通に接する事が出来ると思う。

はは。こんな風に考えちまうなんてやっぱり私も寂しかったのかな。

そして私はこの二人の会話を聞こうと、扉に近づいた。

「……ジジィ。
この近衛木乃香……、お前…血縁……か？」
「おお！それはワシの孫じゃ！
どうじゃ！カワイイじゃろ！？」
「五月……、ジジィ。
つうか……は関係者じゃ……のか？」

転校生の方はやっぱり扉越しだから聞きにくいな。
それより学園長はどんだけ木乃香が好きなんだよ……
興奮のし過ぎで外に声が響いてんぞ。

「……子…親の……で魔法……は知らん……。
おお！そういえばこの子の親はお主も知っておる青山詠春じゃ！
尤も結婚して名前は近衛詠春になっておるがの」
「ふ～ん。
それにしてもよかったな、お前ら男共に似なくて。
つうかお前と似てたら女として人生終わりだろうがな」

ん？最初の方がよく聞こえなかったな。
つーか魔法って言ったのか？
それと関係者って……ネトゲか？ネトゲのことか？
それよりもこの転校生は学園長に対してタメ口かよ……しかも口ワリィし。

あとドスの利いた声を出すなよ。ちょっとこえぇじゃねぇか。
そして私は会話がよく聞こえるようにもっと扉に近づいた。

「それにしても、この麻帆良の認識阻害の結界は凄いな。
中にいる人の常識まで外とは乖離してんだからな。
つーかここまでヒドいともはや呪いじゃね？
ここまですんだったら一般人を入れずに魔法使いだけの土地にすりゃよかったのに」

息が止まった。私が今まで聞いていたことはネットでもなんでもなくこの麻帆良やこいつらの周りのことらしい。
会話から察するに、この街は魔法使いとかいう、ふざけたものがいる。
そしてそいつらの不都合になることに気付かなくなる結界が張ってある。

「……ははっ、つうことはなんだ、私は昔から正常でおかしかったのはやっぱりこの街だったのかよ……」

そして私の体から力が抜けて扉に凭れ掛かってしまった。

ガタッ！！

「「誰だ（じゃ）！？」」

声が聞こえると同時に私は走り出していた。

クソッ！！なんで！なんで私ばっかりこんな目に！！
しかもこういうのってテンプレ通りなら消されんじゃねぇかよ！！
私は平穏に暮らしていきたかっただけだったのに！！

しかし走っていると急に視界が変わった。

どうやら私はここまでか……
クソッ……まだまだやりたいことだっていっぱいあったのに……

そして自然と目から涙が溢れてきた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ナーヴァ（葵）

逃げ出した女生徒を『トリックルーム』で目の前に転移させたら、
いきなりその場にへたり込んでそのまま声も上げずに泣き出してし

まった。

ゑ？流石にこれは超展開過ぎて俺もついていけねぇんだけど？

それよりこの娘見たことある気がするんだけど？しかも女子中等部の制服着てるし。

「《おい、ジジィ。なんかいきなり泣き出してんだけど、お前どうにかしろよ》」

「《ふぉ！？なんでワシが！？おぬしのせいじゃないのかの！？》」

「《いや、俺のせいじゃねぇよ。俺はこの場に転移させただけだ。よっぽどこの部屋に入りたくなかったんじゃね？（笑）》」

「《（笑）とか！ちょっとひどくないかの！？》」

なんかまだジジィが五月蠅いが無視する。

ちなみに言うと、俺はこいつが魔法生徒かもしれないので念話は使っていない。

今のは俺の『W・M・J（ワイヤーマインドジャック）』を使って会話していた。

もっともあのジジィはテンパっていて気付いていなかったが。

つーかこのジジィでもテンパるんだな。

そして俺はこの女生徒に話を聞こうと近づき、話しかけた。

「ちょっといいかな？」

「ヒッ！！」

「《ふぉっふぉっふぉ！『ヒッ！！』って言われてやんの！！》」

女子に『ヒッ！！』って言われんのは傷つくな。
それにしても……

「《ジジィ、後でシバく》」

そう言いながら、俺はジジィに思いっきり殺気を叩き付けた。
その後になんか言っていた気がするが気にしない。
それよりも今はこの目の前の女生徒だ。

「え～っと、話聞いてた、よね？」

俺がそう聞くと、震えながら頷いた。

やべぇ、すっげぇ話辛ぇ。

「私って、一体どうなるの？」

ヤベ！すっごい慰めてあげたいんですけど！？しかも何気に可愛いし！

あ、つーかやっと顔見えt……
いやいやいや、流石にそれはないだろ。まぁでも確認はしないとな。

「えっと、その前に名前聞いてもいい？」

「千雨。長谷川千雨」

……どうすんべ。

第十一話：転入～！！ゑ？マジで？（後書き）

はい、今回は超展開でしたね

作者も自覚はあるんであんまり突っ込まないで欲しいです

つーかどうしてこうなったｏｒｚ

まあ反省も後悔もせんがな！

ちなみにアンケートですが、千雨ちゃん魔改造計画を練っていたんですが実行してもいいですかね？

?:ダメ

?:ＰＳＩだけ

?:禁書の超能力だけ

?:パクティオーしてイノセンス

?:ぜ☆ん☆ぶ

?:?:?:どれかの組み合わせ

こんな感じですね

期限は二週間後までか、次話投稿時の遅い方で

因みに？なら能力は決まってます（オリジナルにはしません）が一つだけとかなら、こんなのが良いですっていうのがあったら書いてくれると助かります

ではまた次回お会いしましょう

第十二話：これからの選択（前書き）

京都編を消したため二話分少なくなりました

それにしてもマガジン本誌の展開は予想外でしたよ

第十二話：これからの選択

あの後、なんとか千雨ちゃんを落ち着かせることに成功した。
因みにこれから、俺の自己紹介だ。

「えっと、俺の名前は哀川葵。君と同い年だ。
因みに女子校に入ることになっちゃってるけど実際俺は男なんで。
だから君と相部屋になるって話はナシになるから。
そんで男の俺がなんで女子校に入るのかっていうと、このクソジジィが間違えたからだ。
あ、でもこれは他の人に言うなってこのジジィが言ってたから、共学のためのテストケースってことで」

う～ん、この自己紹介って明らかに突っ込みどころ満載なはずなのになんでツッコんで来ないんだ？
やっぱり泣き止んだだけでまだ本調子じゃないのかな？
さて、どうしよう？

「あ、あの！私は一体どうなるんですか！？」

なんか意を決したようにジジィに尋ねていた。

つうか俺、自己紹介したのに空気ってｏｒｚ

「うむ。君には悪いんじゃが、やはりこれは他の人が知っていいことではないから記憶を消させてもらわんとならん」

ジジィがそう言うと千雨ちゃんがまた泣きそうな顔になってしまった。

「おい、ジジィ。お前は女子中学生を泣かせてんじゃねぇよ。
あと、なんで記憶を消すことは確定なんだよ」

「フォ！？これは理由はもろもろあるがお主のためなんじゃぞ！？」

「うっせぇ。なんでこの娘の記憶を消すことが俺のためになんだよ」

「しかし、お主がナーヴァだということが他の者に知れたら大変ではないか！」

「……いや、それの話の時はタカミチが出て行く前だろ。
つーか何のために今俺が自己紹介したと思ってんだよ」

「……あ」

そしてジジィは思い出したような顔をしたと思ったら、急に顔を青くしだした。

「おいおい、ジジィ。いきない顔を青くしてどうしたんだ？（黒笑）

」

「ちょ、その殺気はやめ……」

さて、ジジィ虐めはこの辺にしておいて、マジでどうしよう？

「長谷川さんでよかったんだよね？」

「は、はい」

「今、君にはいくつかの選択肢があるんだ。
まず一つ目。これはジジィの言ったように記憶を消す。でもこれには問題があるんだ。
実はここは認識阻害の結界が張ってあったんだ。でもそんな中、君が入ってきてしまったことを考えるに、君にはそれ関係の魔法が利き難い体質だと思うんだ。
だから、記憶を消したとしても体質は変えることは出来ないからまた今回と同じように巻き込まれるかもしれない。
次に二つ目。これは記憶を消さずに魔法関係者になる。
でもこれだと君はこの学園で魔法を学ばなければならない。
しかも学校に通いながらだからこれはかなり大変だと思う。
あと、もしそうするなら俺のことを誰にも言ってはいけない。
もし言ってしまったら、この学園、いやこの国が大変なことになってしまう」

ひとまずここまで言って千雨ちゃんの反応を見るが、顔を真っ青にして震えている。

う〜ん、やっぱり女の子のこんな顔を見るのは心苦しいな。

「あ、あなたはいったい……」

つーかさっきから思ってたんだけど、なんか言葉使い違くね？
ま、そんなことはどうでもいいか。

「それは一応最後の選択肢を聞いてからにしてくれ。
そんで最後の選択肢なんだが、魔法のことを知ったまま誰にも関係者になったことを告げずに俺自身が君自身の力である程度の危機を切り抜けられるように鍛える。
まあ、もしそれを選択するなら俺のことを、流石に詳しいことは教えられないが、大まかなことは教えるよ。
そんである程度の危険なら俺が守るよ」

「そんなこと言っていいのかの？」

「うるせぇよジジィ。もともとはお前が原因なんだからお前は口を挟むんじゃねぇよ。
あと原因はこっちにあんのになんで選択肢を少なくせにゃならん。
それに俺は連合の人間じゃねぇんだからそのルールに則る必要はねぇんだよ。
本来なら自由にしてやりたいんだがなんとなく俺の勘なんだが近々なんかある気がするからこれから選んだ方がいい気がする」

原作は知ってるからあの秘匿の『ひ』の字も知らないようなガキが

来ることはわかってるから、自分で原作方面に進むかそうでないか決めてもらわないとな。

「そんなテキトーな……」

「うるせぇよ。つうか俺の勘の的中率は今んとこ１００％なんだよ」

勘っていうより原作知識だけど。

「それで、長谷川さん。本当に申し訳ないんだがこれから選んでくれ。
あとまだ考えたいならゆっくり考えてくれてもいい。
こんなことに巻き込んだ責任はしっかりとるよ」

「じゃあ、もう少し時間を下さい」

う～ん。やっぱり言葉使いがイメージと違うな。もしかしてこいつちゃんと俺の自己紹介を聞いてなかったんじゃね？

「長谷川さん？さっきも言ったけど俺は同い年だからタメ口でいいんだよ？」

「……考えておきます」

これって多分関わりたくないから敬語なのかな？
それなら悲しいな。

その後、千雨ちゃんは先に行かせて、俺たちは適当に時間を過ごしていたらタカミチが入ってきてさっき何があったのかを教えたら驚いていた。
まあ正直こいつの反応はどうだっていいや。

そして俺はこれからあの人外魔境へ踏み込むことになる。
つーかマジだりぃ。

第十二話：これからの選択（後書き）

前回の結果はパクティオーしてイノセンスに決定しました

つーか正直一番予想外でした

これだけは全く考えてませんでした

てなわけでもっかいアンケート取りたいんですが、候補は攻撃型か補助型か、オリジナルか作品中のものかって感じでよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8279p/

魔法世界の超能力者

2011年10月8日05時04分発行